マンガふるさとの偉人

井谷家二代記

～地域の発展につくした父子の軌跡～

登場人物

井谷 正吉（いたに まさよし）

主人公。旧庄屋・井谷家の長男として生まれる。根っからの坊ちゃん気質で、明るくまっすぐな性分。自分にとって正しいと思うことを、迷わず行動できる。
一方で自分に合わない事、いやなことは投げ出しがちな一面も。

大瀬 東作（おおせ とうさく）

三重県七保村村長。正吉を養蚕の技術員として採用する。義務教育と地方自治の先駆者といわれる。熱心な化学研究者でもある。

土上 貞枝（つちがみ さだえ）

土上重助の妻。宇和島出身で、父親と正命が同じ郡会議員の仲。

土上 重助（つちがみ じゅうすけ）

三重県の養蚕技師。愛媛県に在職中、正命が結婚を世話する。

井谷 正命（いたに まさみち）

正吉の父。二十三歳で初代日吉村村長となる。村の発展のために私財を投げうち、道路の敷設、私立日吉実業学校の設立などを行う。地域の人たちの生活と暮らしを守ることを第一に考え、人のために行動することのできる人物。

りこ婆（ばあ）

井谷家の使用人。表裏なくよく働く正直者。

井谷 登喜子（いたに ときこ）

正吉の姉。美人でおしとやか。生まれつき体が弱い。

井谷 和香栄（いたに わかえ）

正吉の母。料理も裁縫も完ぺきにこなす、できた女性。

植村 龍世（うえむら たつよ）

キリスト教牧師で、賀川豊彦の秘書。理想の社会を実現するため正吉と行動を共にする。

賀川 春（かがわ はる）

賀川豊彦の妻。香川の活動を共に支える社会運動家。

賀川 豊彦（かがわ とよひこ）

キリスト教社会運動家。貧民街で貧しい人の救済活動を行う。

❶ 日向谷川

❷明星ヶ丘

右手前に見える井谷家の裏山から、明星ヶ丘一帯を見下ろした写真。左の大きな建物は大正３年（1914）に増築された尋常小学校の校舎です。

▲昔の明星ヶ丘

❶日向谷屋敷

日向谷庄屋所・井谷家の旧邸。明暦３年（1657）～明治 32 年（1899）まで 243 年間、井谷家の居宅でした。この屋敷の一部を❷明星ヶ丘に移したのが、❸井谷家住宅です。

▲昔の日向谷屋敷

❹武左衛門翁及び同志者の碑

昭和２年（1927）に４日間かけて、井谷正吉が仲間と共に宇和島から運んだ石碑。井谷家住宅の西側にある、武左衛門広場に建立されました。

▲現在の鬼北町小倉付近を通過する一行

❸井谷家住宅

マンガの主人公たちが暮らした家は、今も明星ヶ丘に建っています。シンプル・質素ながらも斬新な造りの住宅は、現在、国登録有形文化財に指定されています。

▲井谷家住宅の庭先に立つ、晩年の井谷正吉

マンガの中に出てくる場所は、私たちの身近にあります。マンガを読んだ後は、地図を参考に実際に訪れたり、昔の写真と見比べてみましょう。

❻井谷馬場

井谷正命の働きで開発が決まった宇和島ー日吉線ですが、下鍵山側の道路予定地は、日吉橋が架かるまで放置されました。正命が提供したその道路予定地は、何もない様子から「井谷馬場」と呼ばれました。

▲石垣で脇を固めた直線の道が川で止まり、橋が架かるのを待つだけの状態になっている

❺幸田町

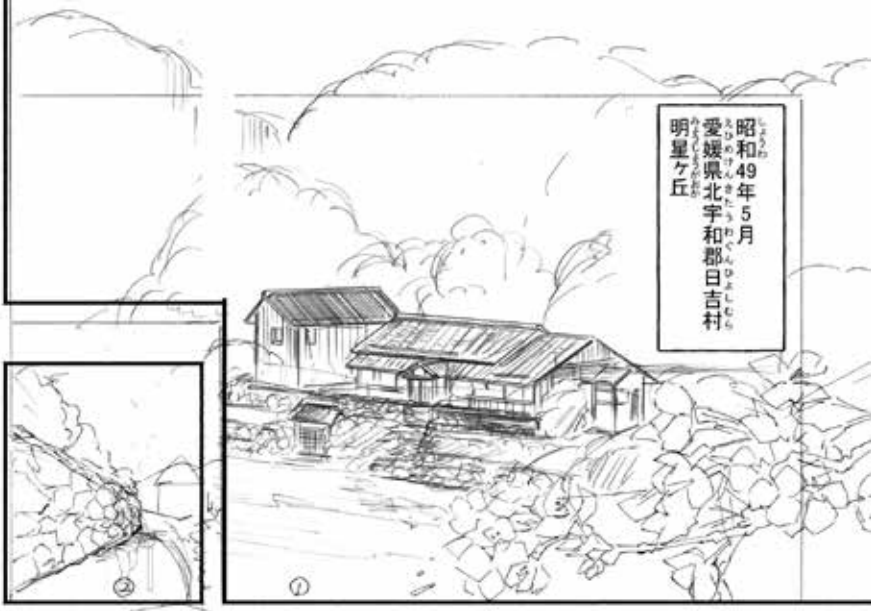
井谷正命が土地を無償で提供して造られた幸田町。宇和島ー日吉線と、日吉ー長浜線・父野川線の交差点として、広い十字路沿いに商店などの街並みが造られました。

▲昭和10年（1935）の大火を経て、復興した幸田町

目次

第1章　井谷家のこと……7
第2章　井谷正命、その人……41
第3章　井谷正吉と明星ヶ丘……71
第4章　現代に受け継がれる井谷イズム……129
〈巻末資料〉
偉人紹介　井谷正命について……142
偉人紹介　井谷正吉について……144
参考文献……146

第1章　井谷家（いたにけ）のこと

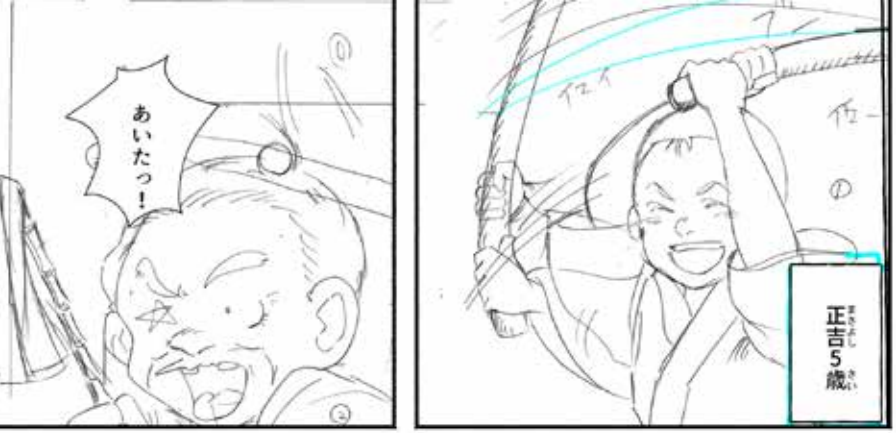

昭和49年5月
愛媛県北宇和郡日吉村
明星ヶ丘

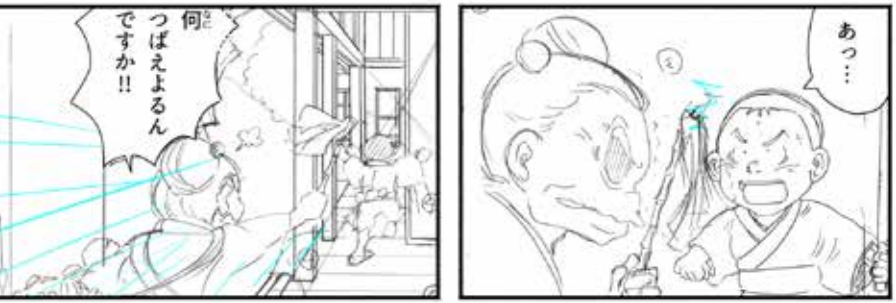
そんな父の
偉大な背中を追い続ける
人生だった…。

幼い頃は父を恐れ、
青年期は父に反抗した…。

明治28年
4月29日・井谷家

私は父・正命と
母・和香栄との間に
長男として生まれた。
井谷家は、
江戸時代から
代々庄屋を
務めてきた。
日向谷にあった屋敷は
あまりに大きく
手がかかるため、
下鍵山に一部を移築した。
それが、今も
私が住む家である。


正吉5歳
あいたっ！

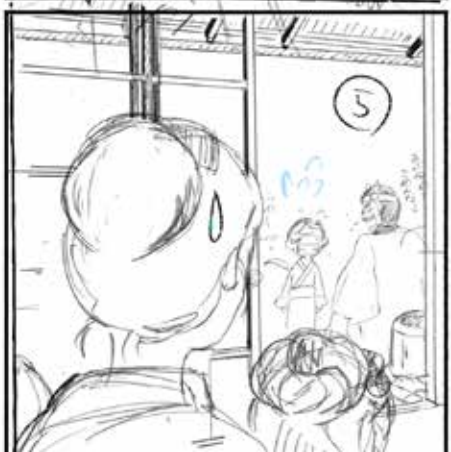

あっ…
何つばえよるんですか!!

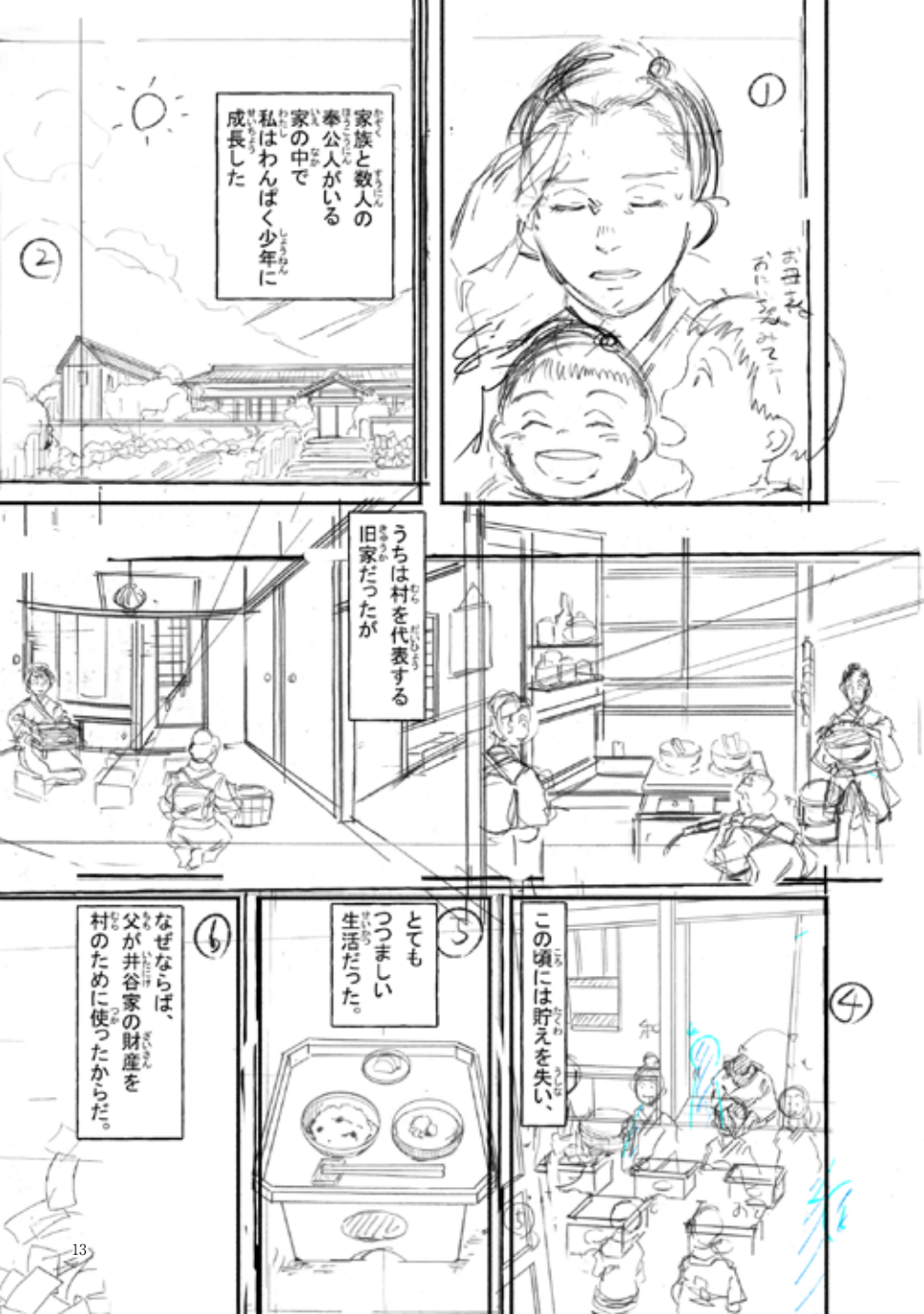
おっとろしや！おわえちこんよな…
あーーー！
⑥

①
がいに大きい、のこぎり！
こうやるんやな…

④
こぉぉらぁぁーーー!!いらわれん!!

③

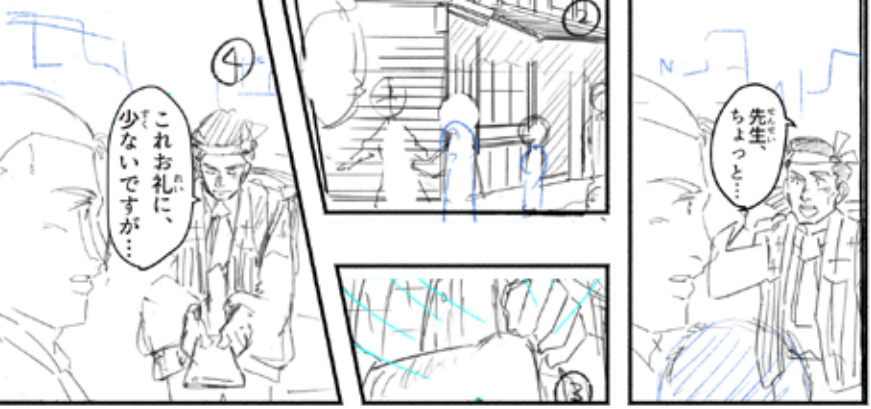

⑤


①
お母さん
おにいちゃんみてー
②
家族と数人の
奉公人がいる
家の中で
私はわんぱく少年に
成長した
うちは村を代表する
旧家だったが
④
この頃には貯えを失い、
⑤
とても
つつましい
生活だった。
⑥
なぜならば、
父が井谷家の財産を
村のために使ったからだ。

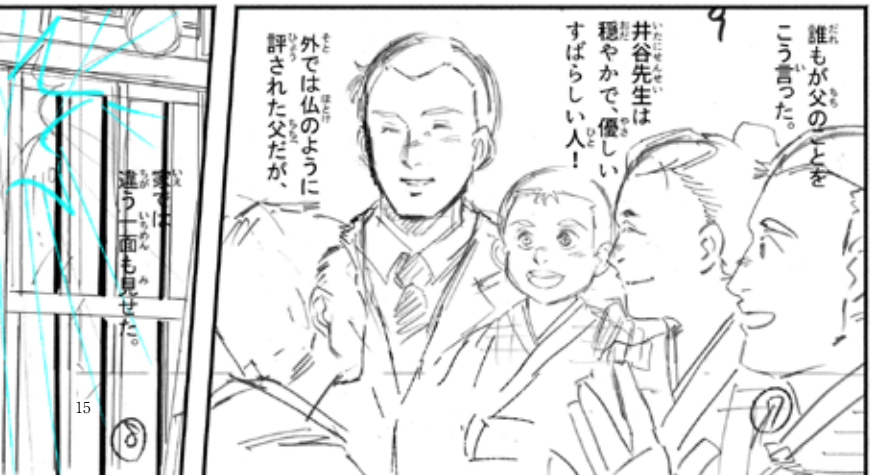
①
明治23年、市制・町村制が実施され、日向谷、上鍵山、下鍵山、父野川、上大野の5か村が合併し、日吉村が誕生した。
日向谷
上鍵山
下鍵山
上大野
父野川
②
その初代村長が、父・正命だった
父は、村長や郡会議員、県会議員などをつとめ、人々から頼られる存在だった

③
井谷さ～ん
④
うちの村でもめ事が起きとるんだが…今度ゆっくり相談できんか？
わかった。明日の晩はどうだ？

⑥
先生～
⑦
おかげさんで、うちの子も小学校に行けるようになりました
⑧
そうか、それは良かった！
ありがとうございます。


先生、ちょっと…
これお礼に、少ないですが…

こんなことするもんじゃない！
政治家に渡すような金があるなら、
子供のために使ってあげなさい。

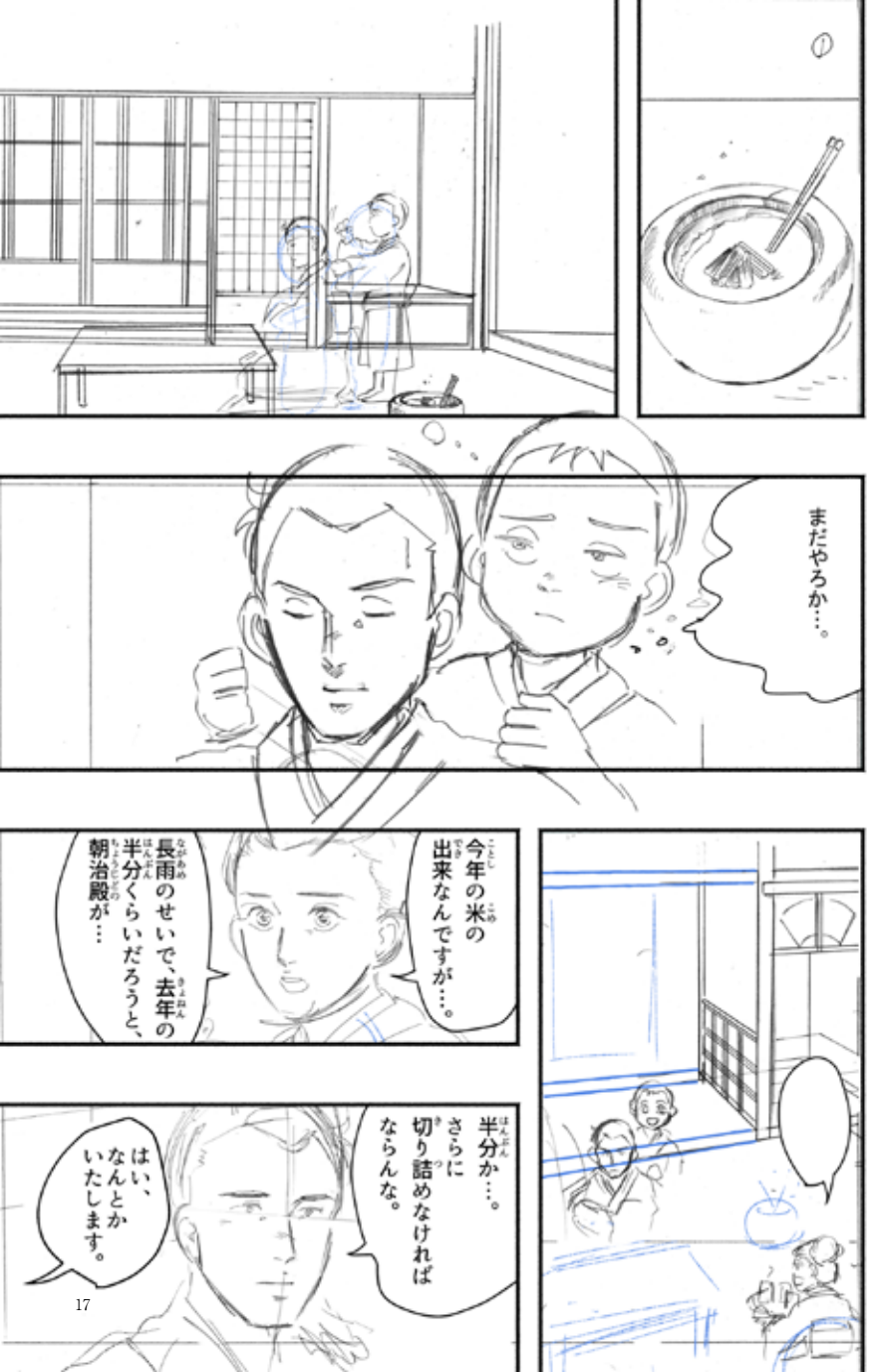

誰もが父のことをこう言った。
井谷先生は穏やかで、優しいすばらしい人！
外では仏のように評された父だが、
家では違う一面も見せた。

おかえりなさいませ。どうなさいました？

反対派にやられた！意見を通す代わりに辞めてきてやったわ！

あらまぁ・・・

正しいのはこっちなのだ！


まだやろか…。
今年の米の出来なんですが…。
長雨のせいで、去年の半分くらいだろうと、朝治殿が…
半分か…。さらに切り詰めなければならんな。
はい、なんとかいたします。

①
②
③
④
⑤
⑦
同じ人間じゃのに。なんで小作人はこがいに立場が弱いんやろう…？
旦那様。米の出来ですが…

やはり去年の半分の出来でした。
そうか。
仕方がないな。
「明治弐拾五年以来借金為ス可ラスト知リツ、出来タ遣リ繰リ書類」
（意味：明治25年から借金はいけないと分かっていながら出来たやり繰りの書類）
まずは金を借りられんか、
菊山家に文を出すか…。

父はワイロを受け取らない清廉潔白な政治家だったが、いつもお金のやりくりばかりしていた。

父が残した借用証書の綴りは厚さが約50cm、増えるばかりの借金を笑い飛ばすような洒落歌を表紙裏に残している。

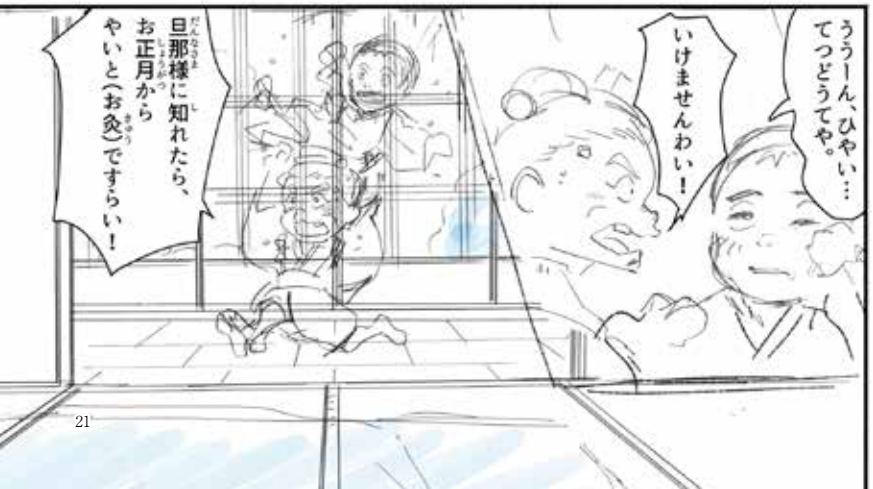
「借銭の棒にその身をたたかれきてん気にして振り回すべし」

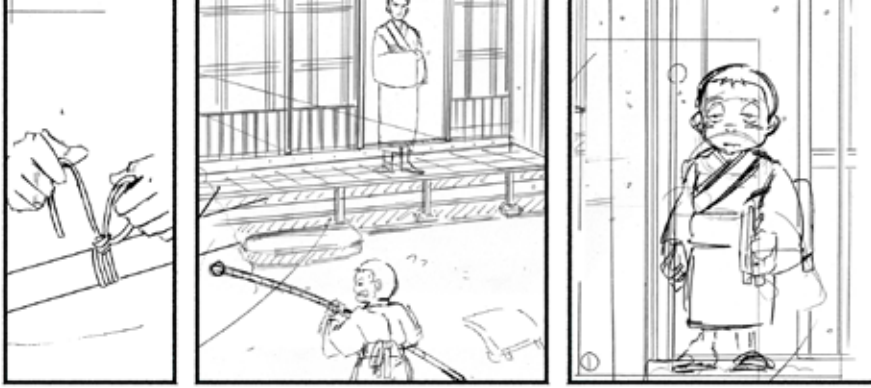
「借銭の棒が追々長くなりふり廻されぬ年の暮れかな」

また父は和歌や漢詩、歴史の知識が深く、さらに数学は最も得意とする、学問も教養もある人だった。

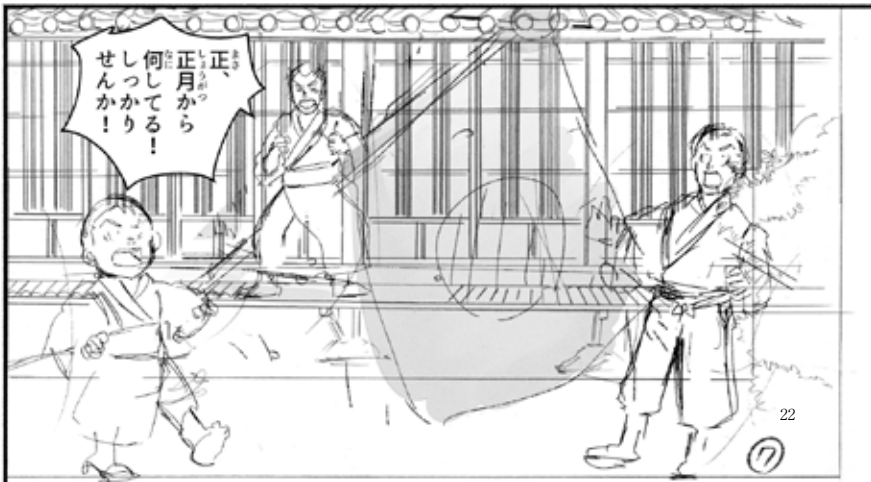
そんな父は、兄弟の中で私にだけ厳しかった。

特にいやだったのが、祝日ごとに国旗の上げ下ろしを一人でしなければならないことだった。

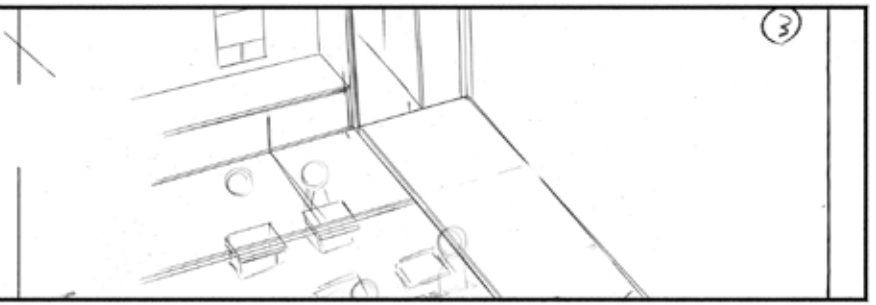


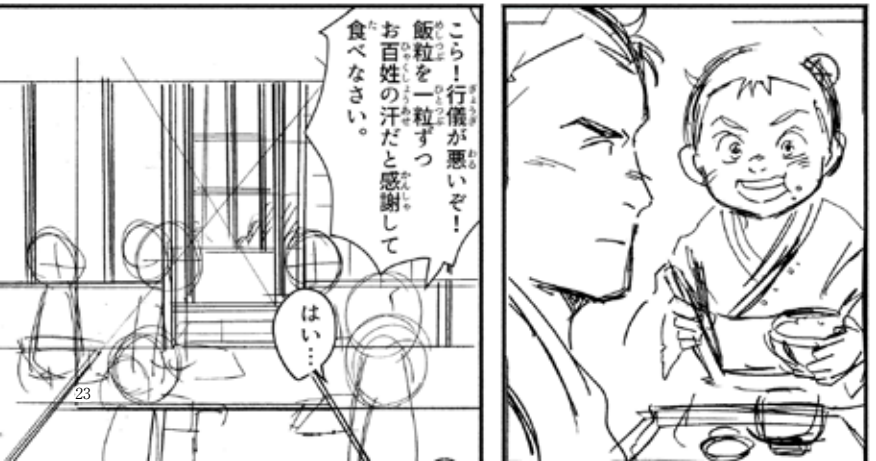


ううっ…
あ、坊ちゃん！
手を貸すな！


正、正月から何してる！しっかりせんか！

食べ物といえば、朝から晩まで味噌、沢庵に野菜の煮物ぐらいで、魚や肉は珍しかった。

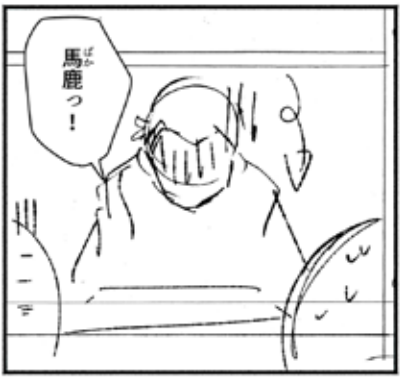


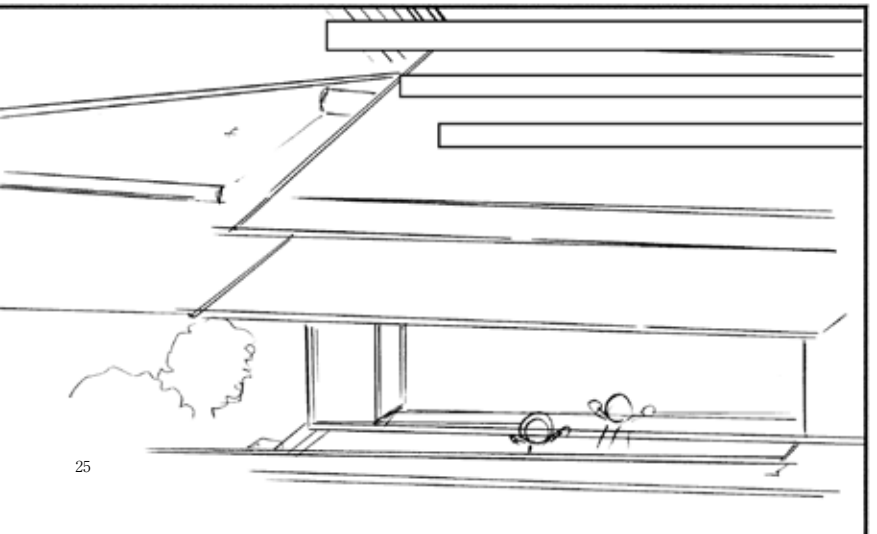


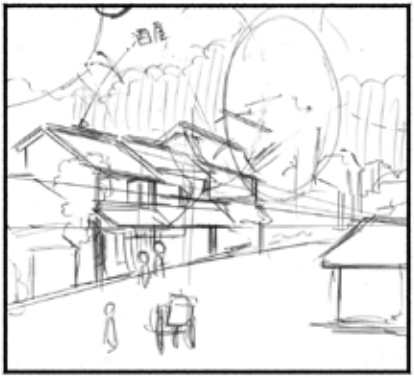
※1円=100銭=1000厘、13銭=130厘

即答できないと飯はお預けで、
間違うと頭を叩かれた。
私は食事の時間が恐ろしく、
父がいない時は嬉しかった。

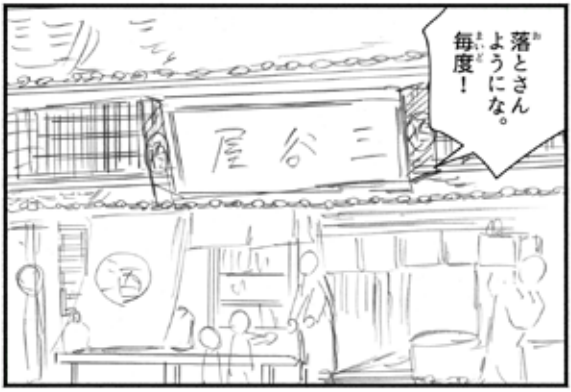
正吉の膳を下げなさい！



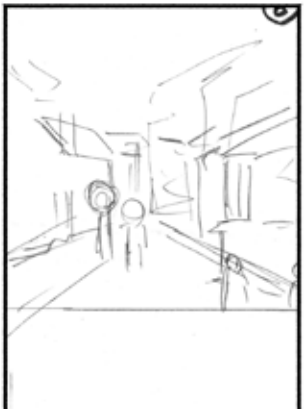



酒屋

三谷屋でお酒を1升買ってきてちょうだい。
…はーい

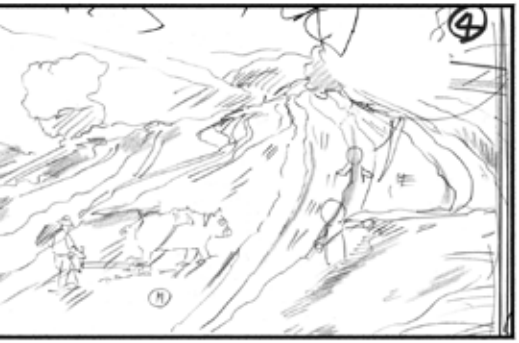

三谷屋
落とさんようにな。毎度！

酒



代わりばんこで持っちいのう。
はい！
酒

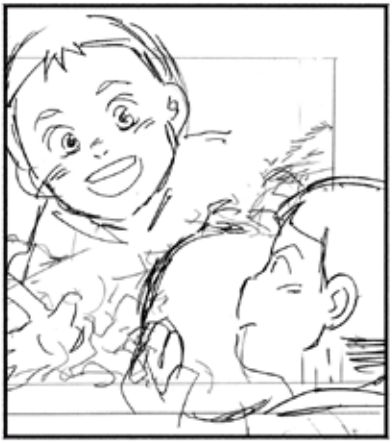
①
もー、泣きみそやなー。

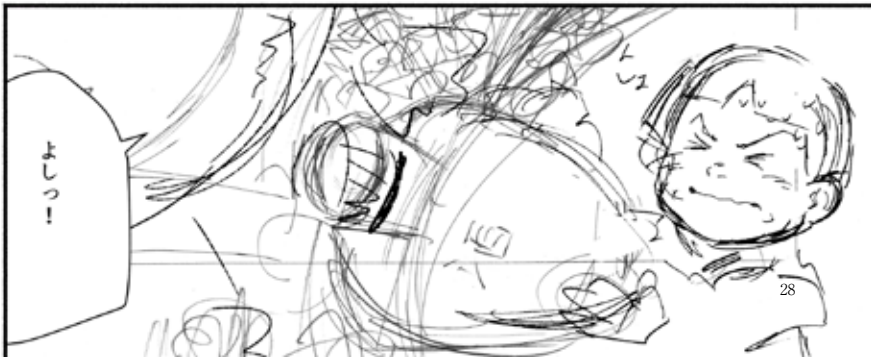

④

ほんなら近道しよう！

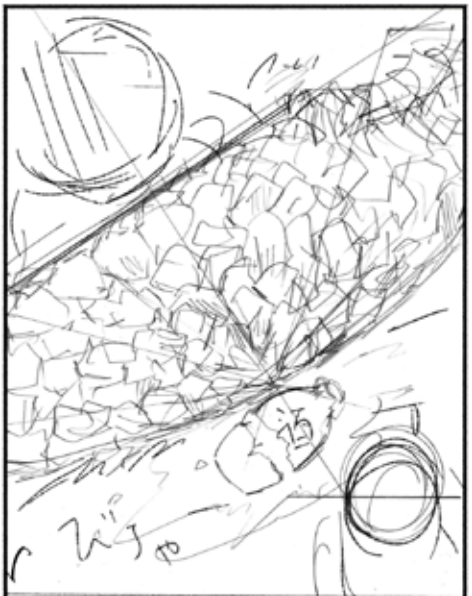
あ!! 近うなっちきた！
あとちょっとじゃ！
⑥

あれ？
道が
のうなっとるなぁ。



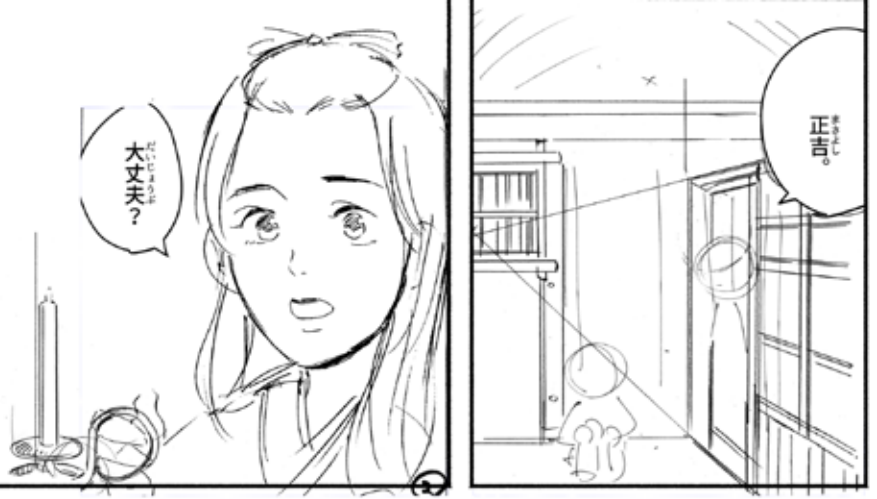


あ
酒

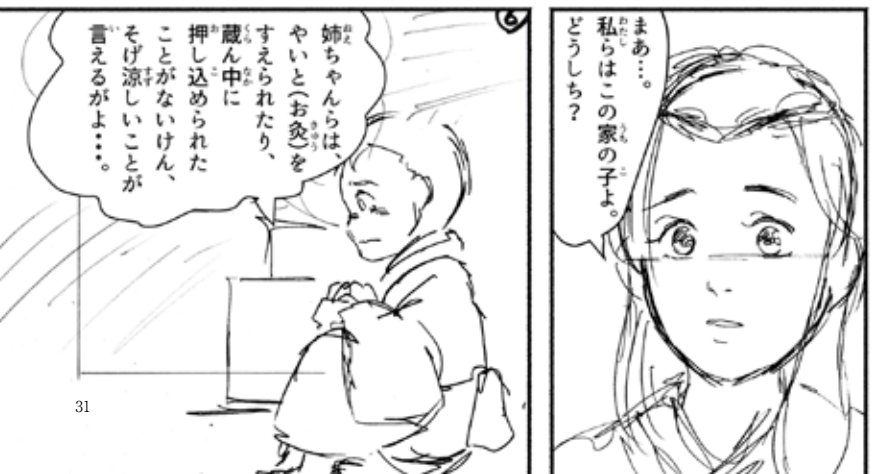

酒

そんで徳利を割っちしもうたんです…。
お前は、徳利を抱えずに栓だけ握ったのか？

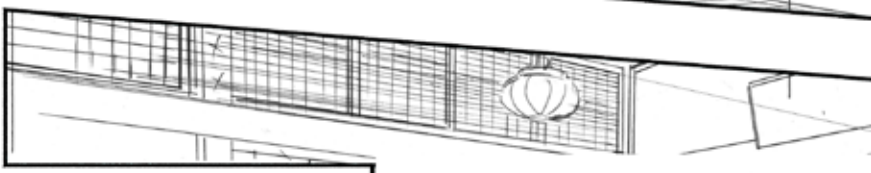
このっ馬鹿者！
こっちにこい！
しばらくここで反省しなさい！
うわーん!! やめてーー！ ごめんなさい！


正吉。
大丈夫？

はい…
私は貰い子と違うかな？
知っちょったら教えちゃんない。


まあ…。私らはこの家の子よ。どうしち？
姉ちゃんらは、やいと(お灸)をすえられたり、蔵ん中に押し込められたことがないけん、そげ涼しいことが言えるがよ…。

あいはいはい



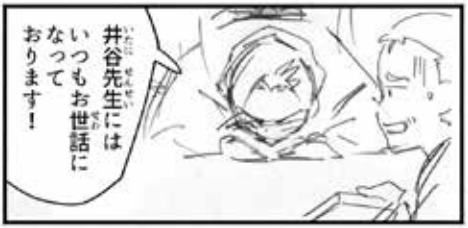
和香栄、もっと酒を用意しなさい！

酔っぱらいはイヤやな…。

正吉、そのお燗を出してきてちょうだい。
えぇ？…はい。

どぼ
ゴロ
ゴロ
ゴロ

井谷先生のご長男ですか？
はい…。


井谷先生にはいつもお世話になっております！

先生のおかげで日吉村がどんどん豊かになっていきますよ！

さあ、こちらでもう一杯！

正、干し魚をあぶって持ってきなさい。

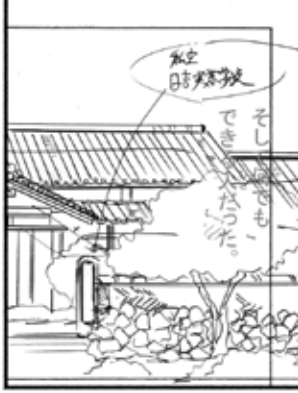
行動力と教養をもち、多くの人に慕われ、尊敬された父だが、家族に対しては神経質で怒りっぽい一面もあった。

一方母・和香栄は、大洲藩加藤公の侍医を代々勤めた菊山家の長女で、美人であったというが私には恐ろしい人であったという印象が強い。

正吉っ!!

そこに直りなさい！

奥さま！捕まえました！
何度言ったらわかるのです！反省しなさい！
ごめんなさいっ！
でかいお灸を据える時の母は、鬼か、オオカミのようだった。
一方、父に対する母は絶対服従
良妻賢母そのものだった。



※ p147 出典情報 01 参照

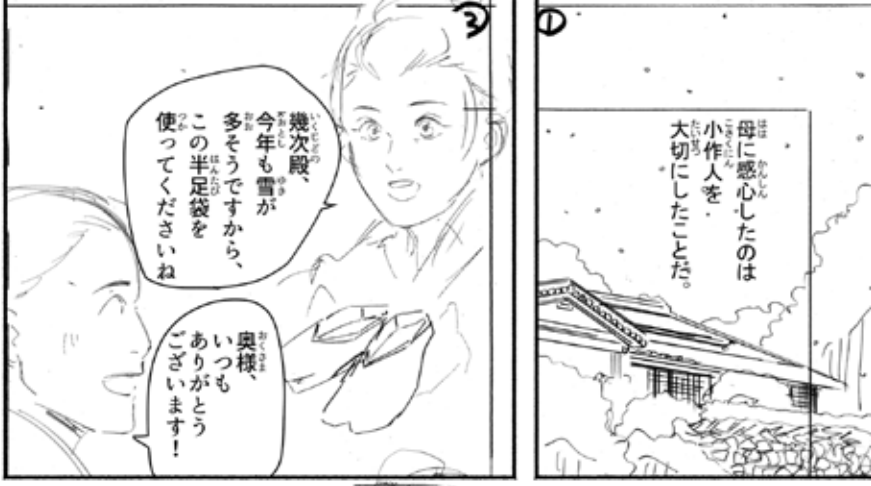
旅館を始めたのもこの頃である。

父は二階建ての大きな旅館を新築し、母に経営させた。

客は父の知り合いも多く、それらの人は金を払わないので母は苦労した。

しかし母は嫌な顔一つせず、

板前から女中の役までよく働いた。

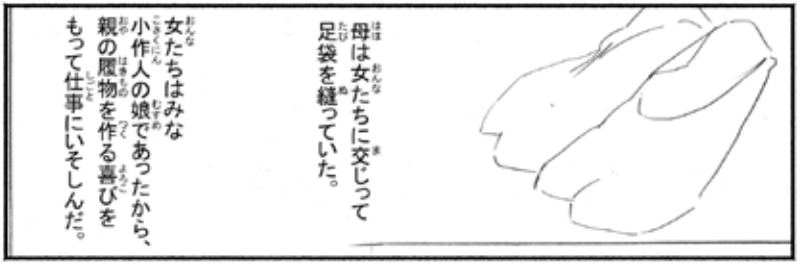

母に感心したのは
小作人を
大切にしたことだ。
幾次殿、
今年も雪が
多そうですから、
この半足袋を
使ってくださいね
奥様、
いつも
ありがとう
ございます！

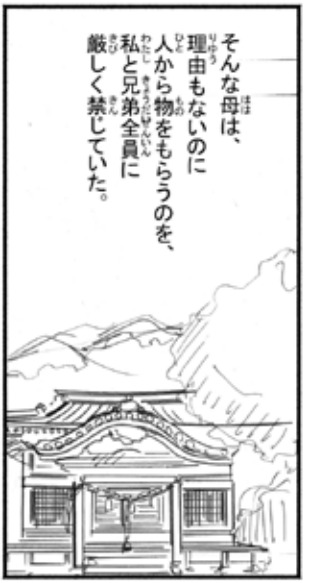
小作人の多くは
昔からの家来衆だった。
しかし呼び捨てにせず
「〜殿」と呼び、
一族のように接していた。

奥さま。ここが…

ここは、
こうして…
ね？

また昔は
「夜なべ」といって、
夕食を終えてから
就寝前まで
2時間以上も
手仕事をする
習慣があった。


母は女たちに交じって足袋を縫っていた。
女たちはみな小作人の娘であったから、親の履物を作る喜びをもって仕事にいそしんだ。


そんな母は、理由もないのに人から物をもらうのを、私と兄弟全員に厳しく禁じていた。

何しよるん？
神社の飾りの彫り物が古うなったけん、直しよるんよ。

ふ～ん。いろんな道具を使うんやなあ。

興味があるんやなあ。そうや、これお食べや

ありがとう！…ほんと、甘うちおいしい！

神社に職人さんがおってね、

その人がくれた柴餅が甘かったんよ！

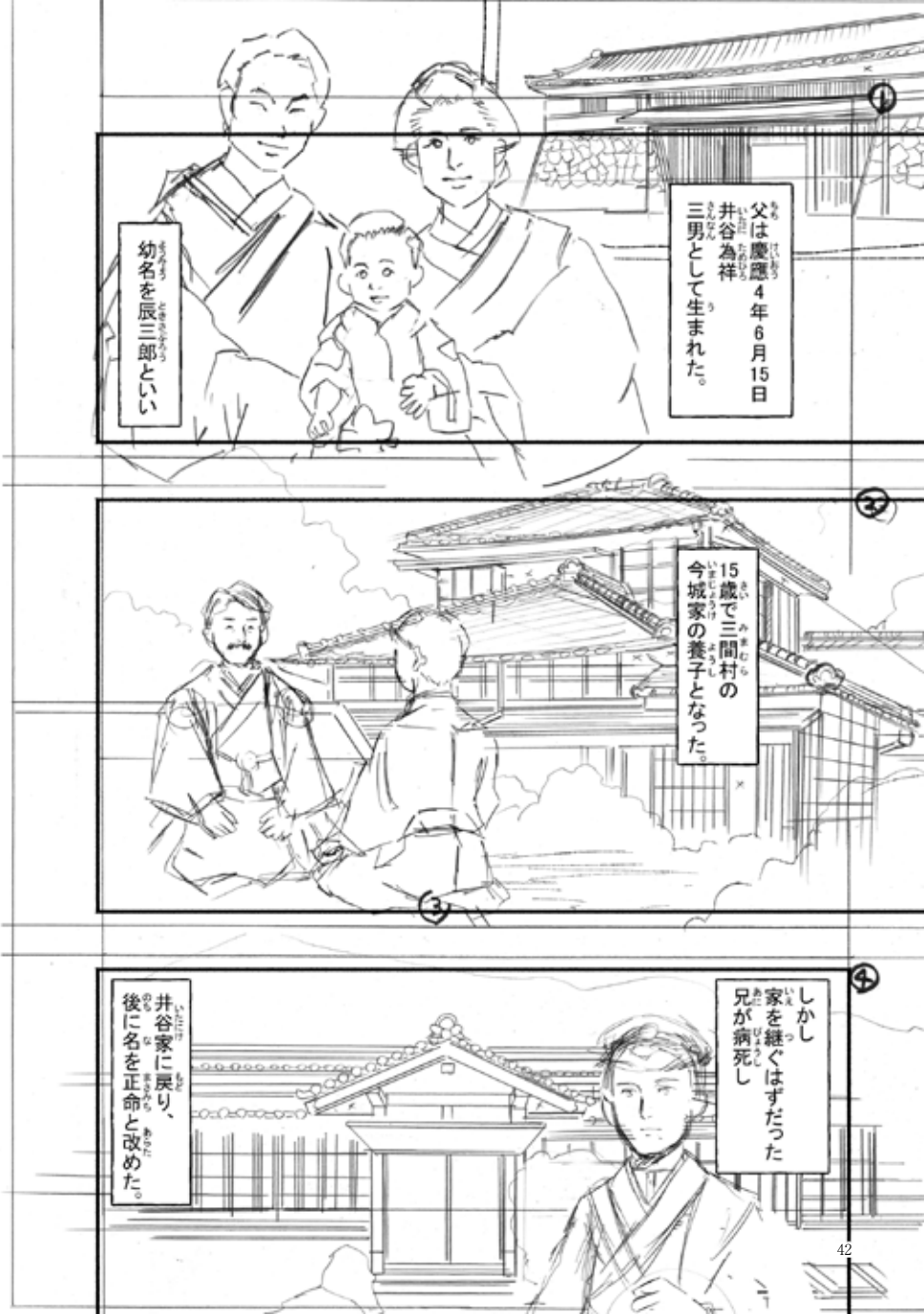
いま、なんと言いましたか…!!正吉、そこに座りなさい！

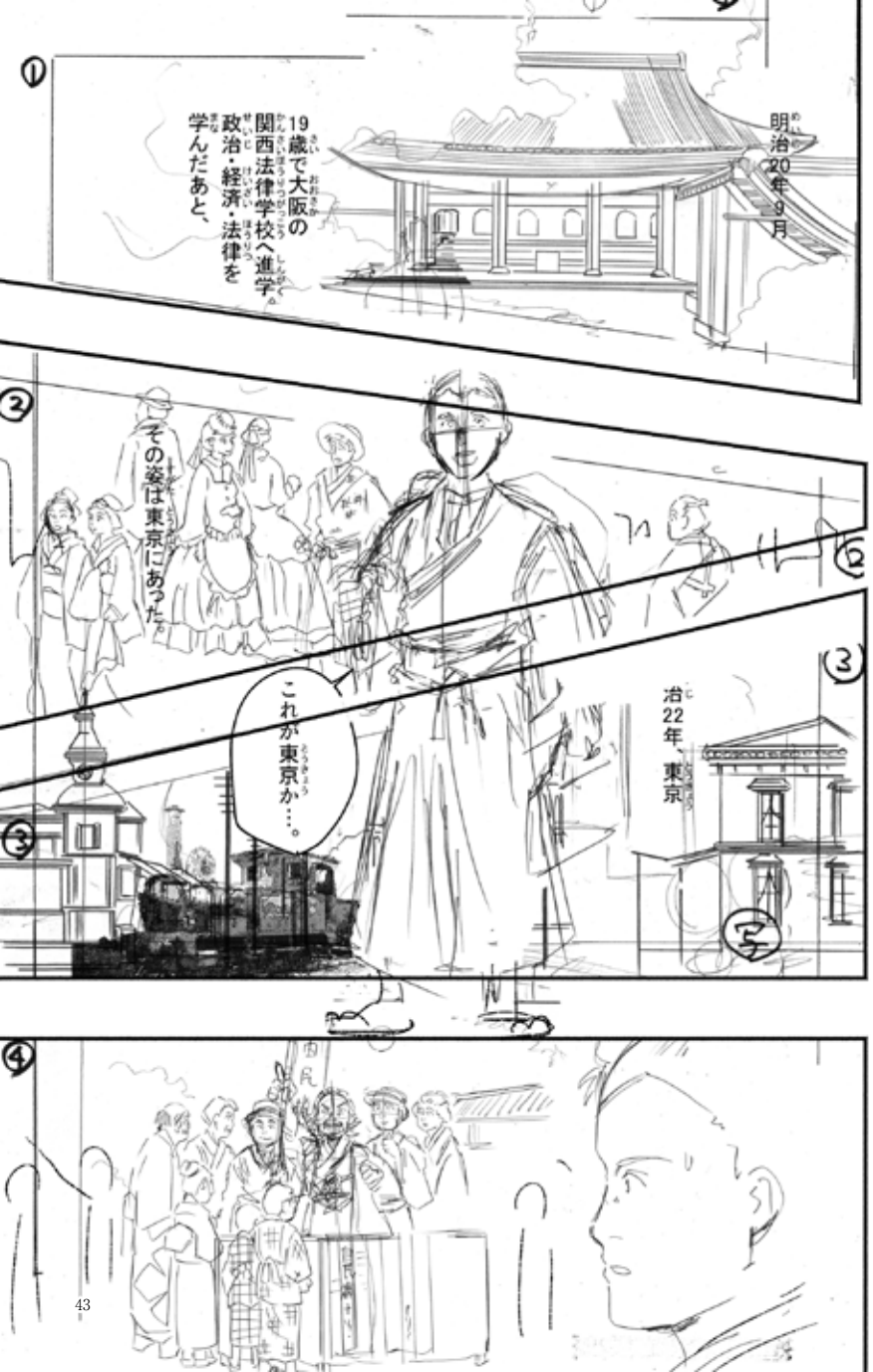
知らない人に物をもらって食べるとは何事かー！

すぐにお代を払ってきなさい！

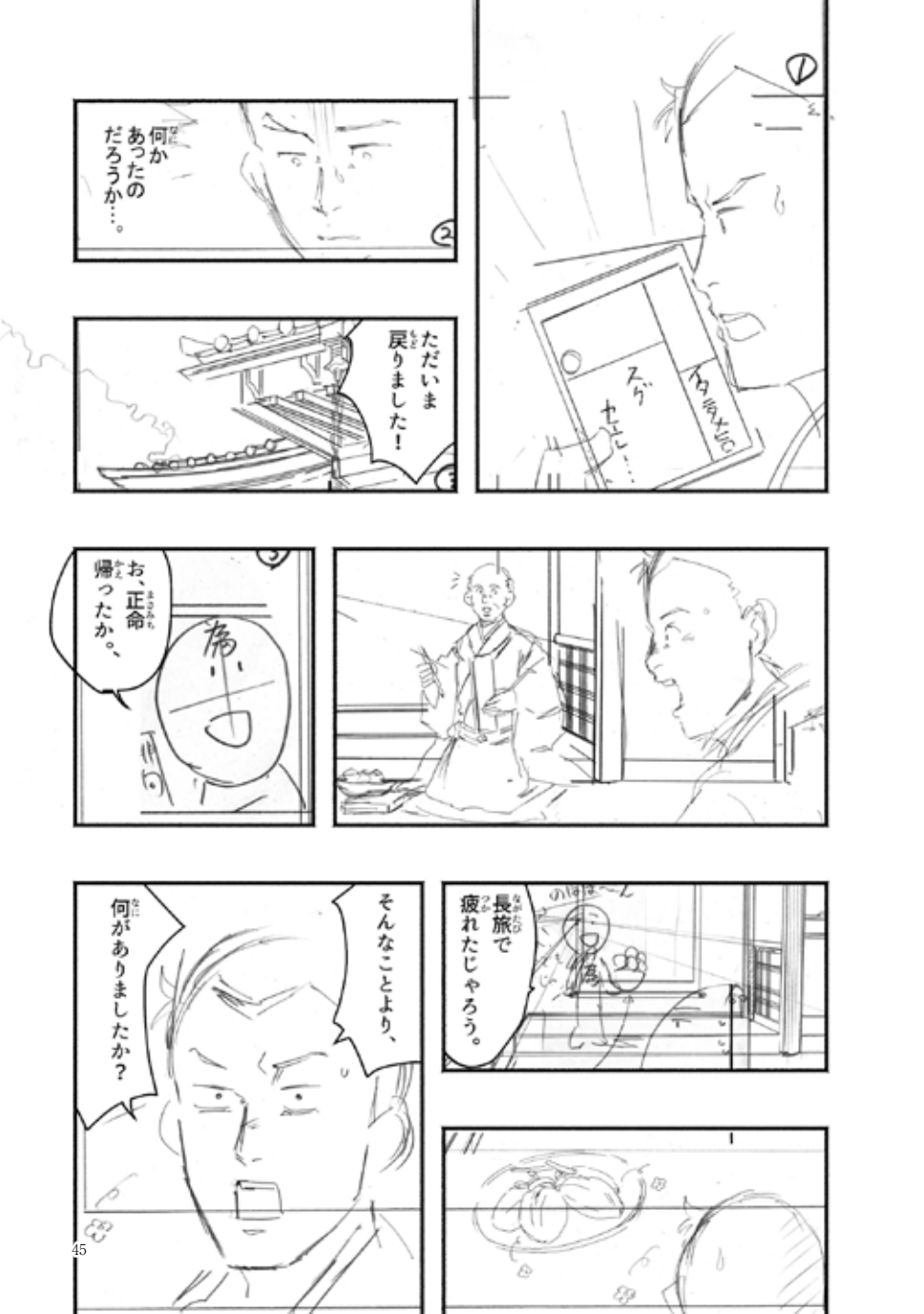
ワイロに潔癖な父と、貰い物を禁じる母。この教育のおかげで、他人から物を貰うことを悪いことだと思うようになった。私はこんな家庭で生まれ育った。

第2章　井谷正命（いたにまさみち）、その人（ひと）


父は慶應4年6月15日
井谷為祥
三男として生まれた。
幼名を辰三郎といい
15歳で三間村の
今城家の養子となった。
しかし
家を継ぐはずだった
兄が病死し
井谷家に戻り、
後に名を正命と改めた。


①
明治20年9月
19歳で大阪の関西法律学校へ進学。政治・経済・法律を学んだあと、
②
その姿は東京にあった。
③
これが東京か…。
治22年、東京
④

※ p147 出典情報 02 参照


何かあったのだろうか…。
ただいま戻りました！
お、正命帰ったか。
長旅で疲れたじゃろう。
そんなことより、何がありましたか？

日向谷
下健山
上健山
上大野
父野川
この辺りの5村が一つになることになっちの。

ふむ。実はのぉ…

私が村長!?

お前に、新しくできる村の村長になっちもらいたいと、皆が言うちょるんじゃ。

これは絶好の機会だ。村の生活をより良くしたい…！
村の発展のために全力を尽くそう！

学んじきた見識が役に立つじゃろ。

明治23年、日吉村役場

私は中央で学んできました。

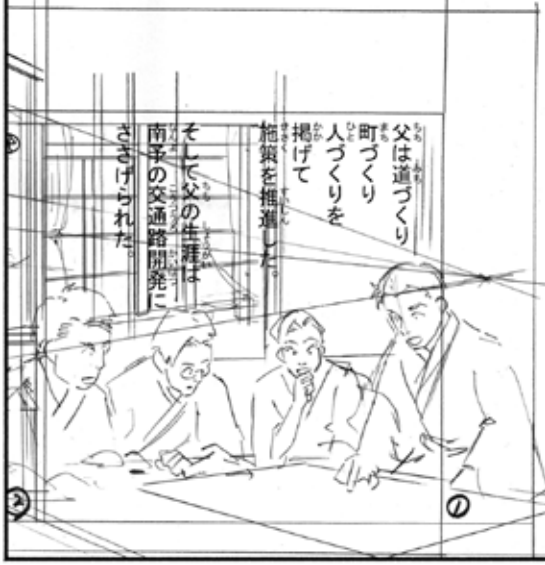
人が集まるところに物も集まるのです。この村の発展のためには交通の整備が最優先なのです。

そこでは鉄道が町々をつなぎ、広い道に人力車や人が行き交っていました。

物も何でもありました

また「自由民権運動」といって、
庶民や平民が自由と権利を求める運動が中央では盛んです。

これからの時代、地域を創るのは、そこに住む「人」。そして「人」を創るのは、学問であり、教育なのです。
皆で力を合わせて、より豊かな村に発展させましょう！



※ p147 出典情報 03 参照

道路整備なくして、古来、「大山奥」と言われたわが村の発展はありえません！
宇和島への道が通れば、こちらの村も必ず発展するはずです！
宇和島から日吉村を通り、高知県へとつながる道路の完成を見据え、その足掛かりとして父はまず「日吉線」を計画。
日吉線沿線の各村長からの同意を取り付け、
連名で愛媛県知事に道路開設の請願書を提出した。
しかし県はおろか、北宇和郡や
同意したはずの沿線でも話題にさえならなかった。

どうすれば道路が通せるのか練り直しだ…
これくらいであきらめるものか。
父は日吉村長の任期を終えた後も、村会議員・郡会議員を歴任しながら、各地を奔走。

③
地理や地域状況を調査し、道路開設の必要性を訴え続けた。

④
明治32年、宇和島ー日吉間の道路建設の調査報告書がまとまり、ようやく道路建設の骨子が定まった。

三間村の道路工事の負担金が多い件のご相談とか…
他村の倍額はさすがに…。
②

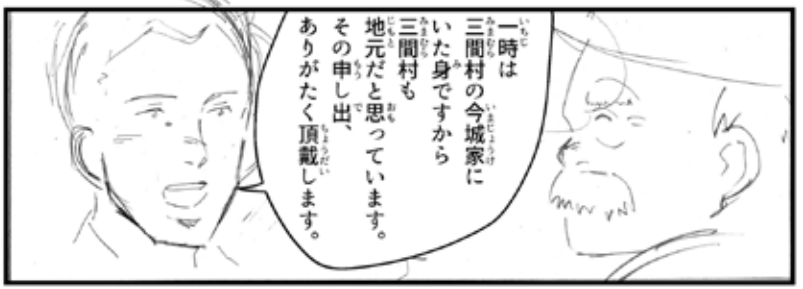
井谷さん、何とかなりませんか。
③

なるほど…。わかりました。足りない費用は私が何とかしましょう。
それで手を打ちませんか？

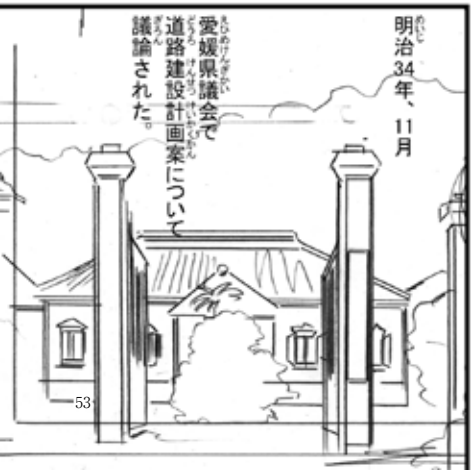
それはありがたい
⑤

待て、待て！
⑥

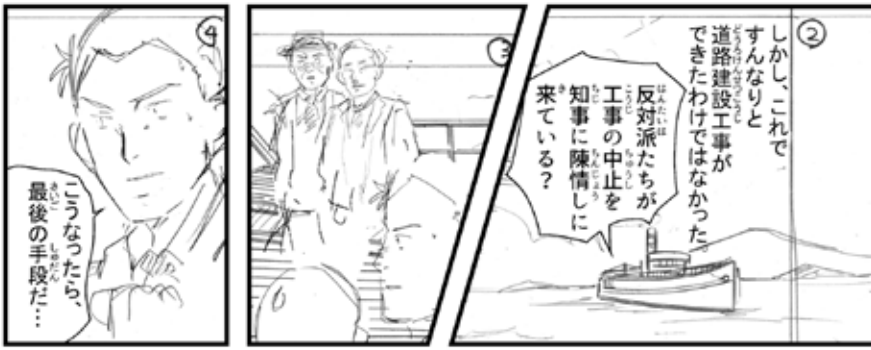
村外の井谷さんにだけ負担を強いるのは地元として恥ずかしい。
半分は儲がもとう！


一時は三間村の今城家にいた身ですから三間村も地元だと思っています。その申し出、ありがたく頂戴します。

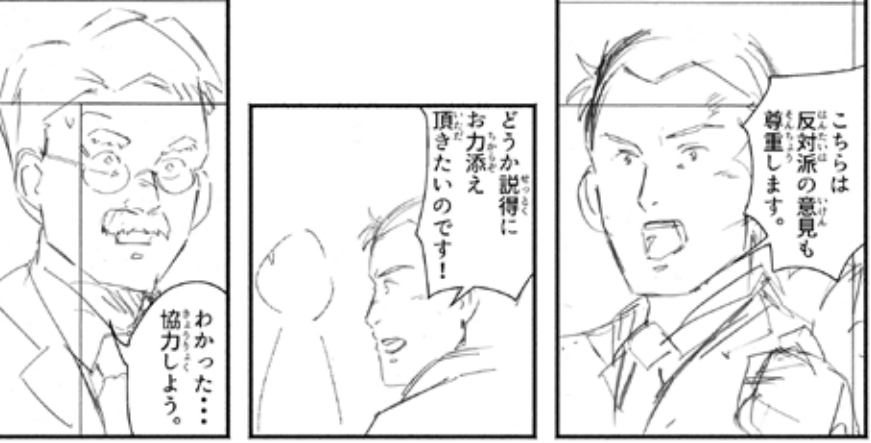
父は三間村の道路建設費用の一部を三間の郡会議員・大高勝治と二人で寄付し、
これによって道路建設計画案が定まった。

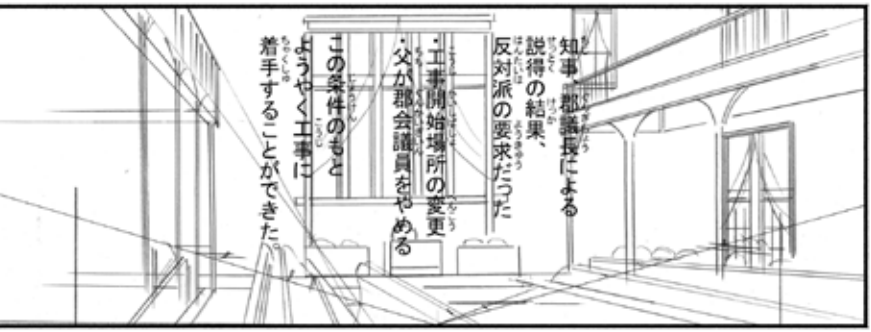

明治34年、11月
愛媛県議会で道路建設計画案について議論された。

承認！
ここでも多数の反対派がいたが承認を得ることができた。


②
しかし、これですんなりと道路建設工事ができたわけではなかった。
反対派たちが工事の中止を知事に陳情しに来ている？
③
④
こうなったら、最後の手段だ…

知事！
宇和島日吉道路の着工は、我々の悲願です！


こちらは反対派の意見も尊重します。
どうか説得にお力添え頂きたいのです！
わかった…協力しよう。


知事、郡議長による説得の結果、反対派の要求だった
・工事開始場所の変更
・父が郡会議員をやめる
この条件のもと
ようやく工事に着手することができた。

郡会議員はやめることになったが、ちょうどいい。郡役所の役人として、ひき続き道路工事にたずさわろう！
明治35年9月
北宇和郡役所
井谷さん！

届きましたよ！
見せてくれ！

指令
村長に
道路建設を
命ずる。
長年
待ち望んでいたものが、
やっと届いた…！
しかし、
これが始まりだ。
道が完成すれば、
沿線の村々は
もっと活気づくぞ！

道路の開通に備えて
日吉線、野村線と
つながるように、
下鍵山に
広い十字路を作ろう。

明治35年、父は井谷家の所有地を無償提供して道路建設を推進した。

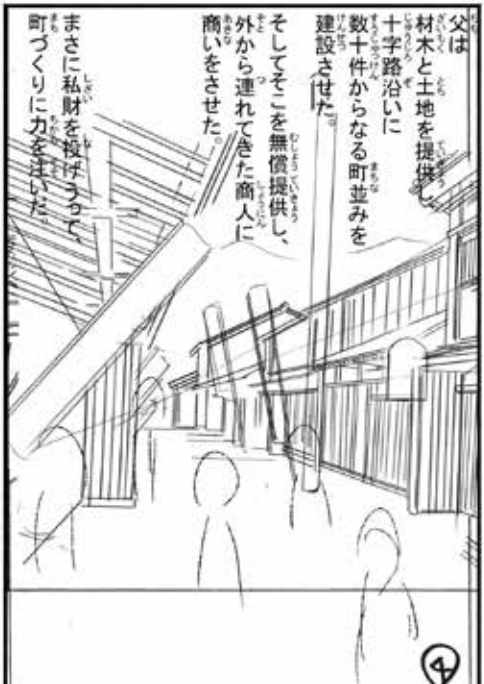
しかし工事が遅れて明治39年まで日吉橋がかからず、下鍵山の十字路は放置されたまま雑草が生い茂った。

その広く草が生い茂る道を見て、『井谷馬場』とバカにする人もいた。

正吉、ここはもう井谷の土地じゃない。
村のみんなのものになった。
それに、よく見ておきなさい。
広いが、ここは馬場ではない。
ここは、大勢の人でにぎわう町になるのだ。
お店も？
ああ、できる！

何でもある町だ！

大正2年
宇和島―日吉間の
車道開通。
先生！
やっと
開通ですね！
これで宇和島までの
移動も
便利になります！


父は
材木と土地を提供し、
十字路沿いに
数十件からなる町並みを
建設させた。
そしてそこを無償提供し、
外から連れてきた商人に
商いをさせた。
まさに私財を投げうって、
町づくりに力を注いだ。

13年かかったが、
とうとうだ。
本当にうれしいよ。

父の構想は
さらに続いた。
次は高知への道である。

高研山をトンネルで抜き
高知県の
梼原・津野と日吉を繋ぐ
車道の建設が必要であった。
大正4年に
車道工事を着工し、
大正15年に念願の
高研トンネル工事が決まった。

これは3年ほど
かかり、その間も
資金繰りの悪化から、
工事を中断する
期間があった。

長かったが
これでようやく
土佐と繋がる。

そうか、それはすまなかった…。
代わりと言ってはなんだが家の裏山に隧道を掘ってくれんか。
せっかくだから、高研隧道の縮小版でつくってもらいたい。

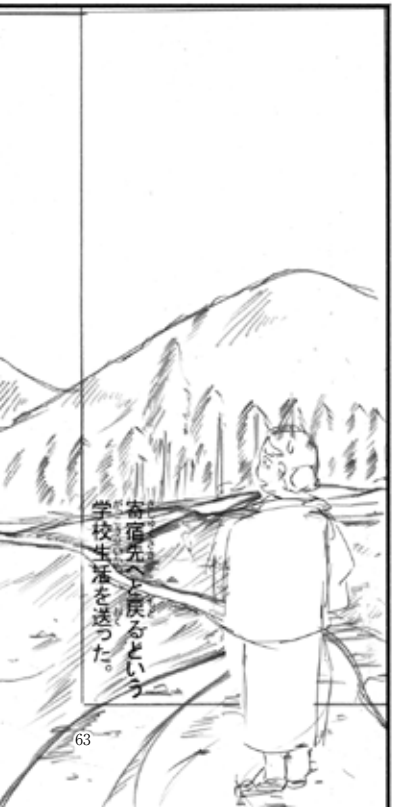
もちろん手間賃は出す！
それはありがてえ！みんな、ひと仕事頂いたぞ！
そりゃいい！任せてくだせえ！
そうして井谷家の裏山には、大正モダニズムの意匠をこらした、ミニチュア版の隧道ができあがった。

昭和3年、高研トンネル開通。大正4年から15年の歳月をかけ、高知と宍崎を最短距離で結ぶ、宇和島・宍崎線が完成した。
構想から36年、父の念願であった道路交通網がようやく完成した。

道路建設と町づくりにあわせて父・正命が力を注いだのが、人づくり、すなわち教育だった。

その頃日吉村には鍵山簡易小学校しかなかった。

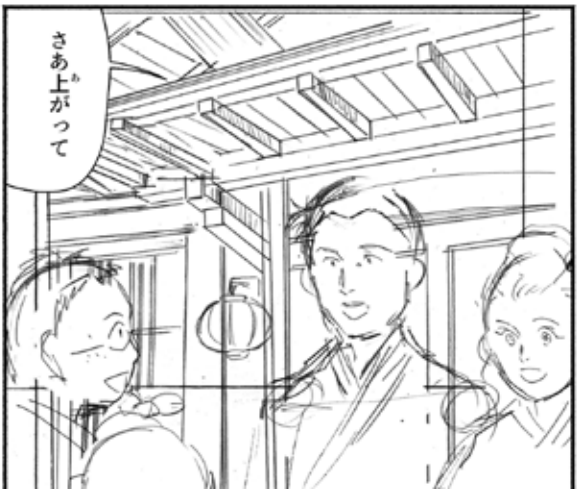
高等小学校（現在の中学1・2年程度）に進学するものは、日吉村からは約10km離れた土居村（現在の西予市城川町）にある学校に入学した。



地域を豊かにするには、それを担う人材こそ大事だ。優れた人材を育てるためにも、子どもが学ぶ場を作らねば。
ここで役に立つ実用的な学問は、農業と林業。これを学べる実業学校を村長として立案したい。
しかし学問は贅沢である という時代的な風潮が強く父の提案は実現しなかった。
明治33年父は郡会議員のときにも、実業学校設置の意見書を提出。
意見書
公立での学校設立を模索したが理解が得られず、これも叶わなかった。
今の郡や県の考え方では、学校設立は許可されないだろう…。
こうなったら、自費で学校を作ろう！
こうして父は、申請。私立の実業学校設立の申請を県に提出。6年後明治39年に許可が下りた。
許

これによって誕生したのが、私立日吉実業学校である。

といっても、学校の校舎となったのは私たち一家の住む家である。



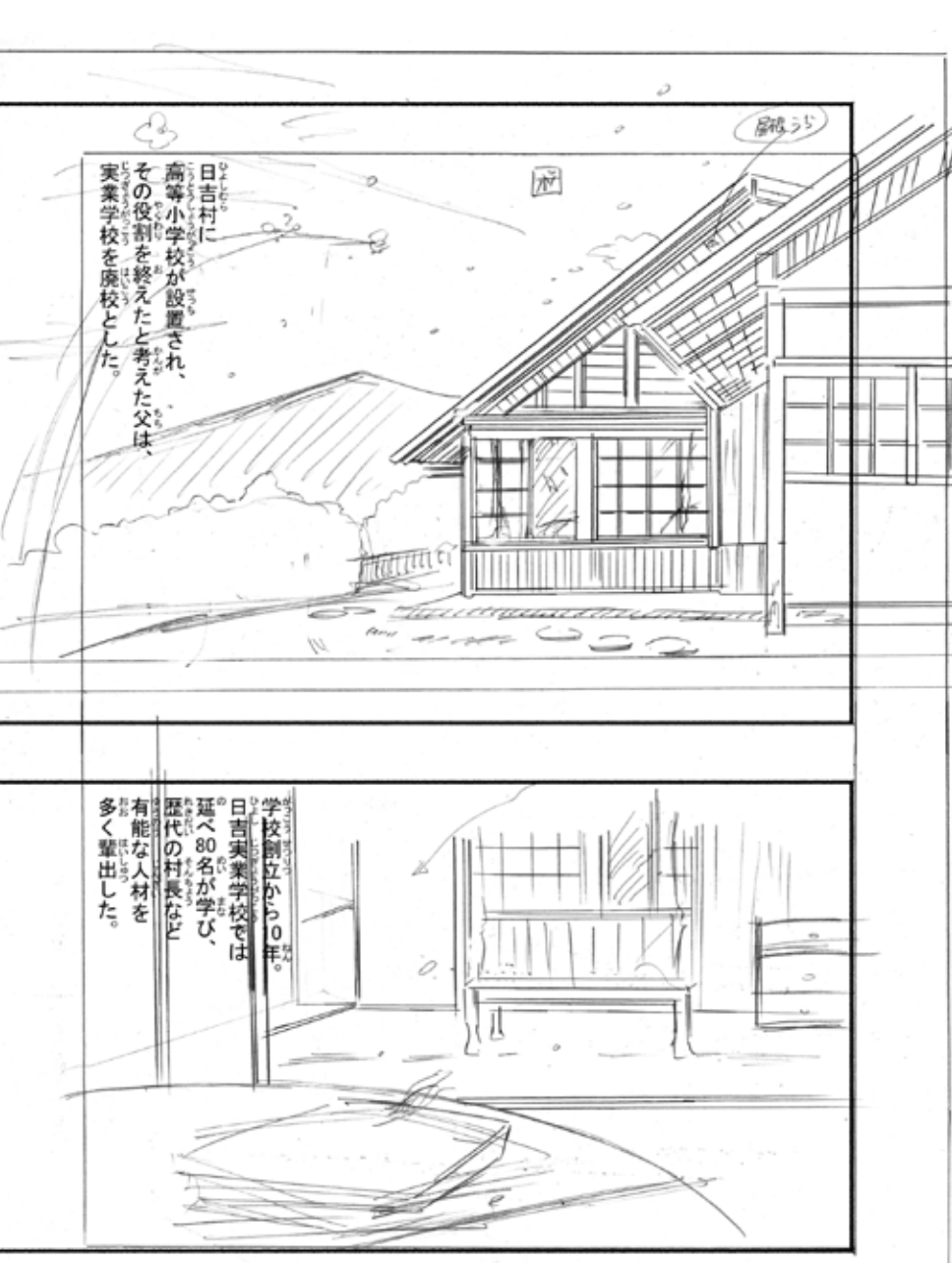
ここでは修身(倫理道徳)
国語、歴史地理、算術、理科、
作文、図画、農業の授業が行われた。
各学科とも非常に難しかったため、生徒はよく勉強した。
これ、わかる人〜
はい、孔子の論語です。
正解！
卒業後はどうするつもりだい？
はい、父の畑を本格的に手伝うつもりです。
それはもったいない…。さらに上の学校で君は優秀だ。学ぶべきだ。
そうか…。では私が学資をみよう。お父上に相談してみなさい
ありがとうございます！

夏休みになると生徒が家に寄り、夕食後などは祭りのように賑やかだった。

父はこうした雰囲気がとても嬉しかったようである。

美人の姉と接することを楽しみにする学生もいたようだ…。

お、宿題がんばってるかね？
はい、はい問7がわからなくて！
問7かずいぶんむずかしいな
どうかしましたか？
いえ！何でもありません！
夏休みなのに宿題がんばってえらいわね
授業もないし、みんなが来ると怒られる回数も少なくて済む！ずっと夏休みならいいのに。


屋根うら
日吉村に
高等小学校が設置され、
その役割を終えたと考えた父は、
実業学校を廃校とした。
学校創立から10年。
日吉実業学校では
延べ80名が学び、
歴代の村長など
有能な人材を
多く輩出した。

カット
イラスト

第3章　井谷正吉（いたにまさよし）と明星ヶ丘（みょうじょうがおか）

私もかつて通った実業学校の生活は、苦悩の日々であった。

一般生徒は朝八時に登校し、

午後四時には家に帰る。

しかし私は

朝七時に起床、

家が学校であり、

夜十時に布団に入るまでが学校なのである。

放課後になっても両親は依然として先生なのだ。

箸で食べ物を刺すとは何事だ！
音を立てない！
ここは禅寺かっ

正吉！
明日の予習は済んだのですか？

ラーしゃあ

や、やりました。

嘘おっしゃい！

息が詰まる！
一家団欒なんて、夢のまた夢のようだった…。

終わるまで夕食はお預けです！

今回もよくできていたぞ。
ありがとうございます！

苦手なところをよく勉強したな。
念をいれて復習しました。

…予習も復習も足りとらん！
…すいません。

私は学力が低く、他と比べてあらゆる点で劣っていた。
父は私を「馬鹿」と言い、私も自分を馬鹿と思うようになった。

姉上の頭と、私の頭を変えてくれませんか。

そんなことしたって同じよ。
あなたと私の頭が入れ替わっても

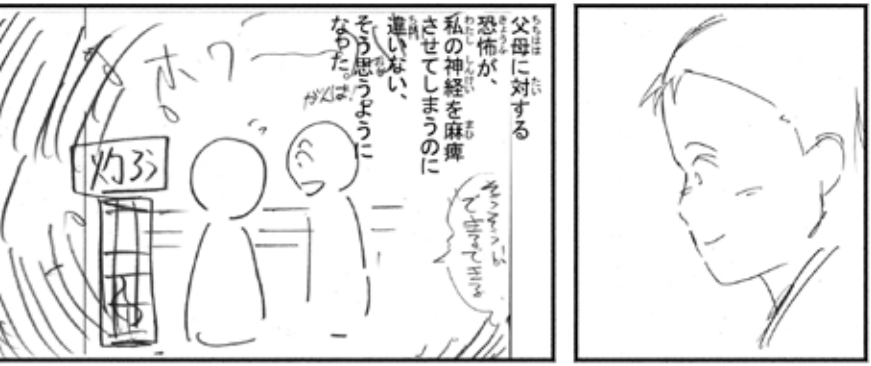
ものを考えるのはやはり、あなたの頭よ。

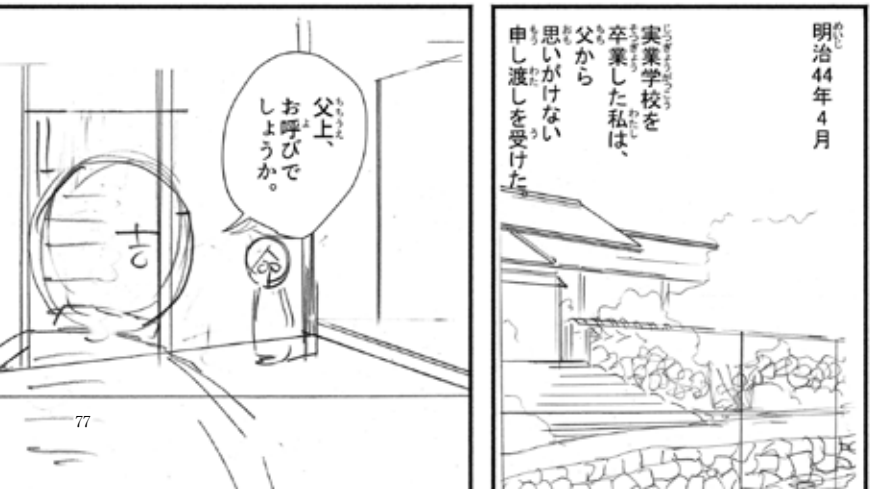
じゃあ私はどうすれば…。
しょうがないわね。

私が勉強を見てあげましょう。

本当に!!
ありがとう!

不思議なことに
姉の前では、
あれほど
嫌いな数学でも
何でも
できてしまう。
なんだ正、
すごい
じゃない！


父母に対する
恐怖が、
私の神経を麻痺
させてしまうのに
違いない、
そう思うように
なった。
そっそっそっい
で言ってエラ


明治44年4月
実業学校を
卒業した私は、
父から
思いがけない
申し渡しを受けた。
父上、
お呼びで
しょうか。

正吉、お前は今後井谷家の家督を護るように。

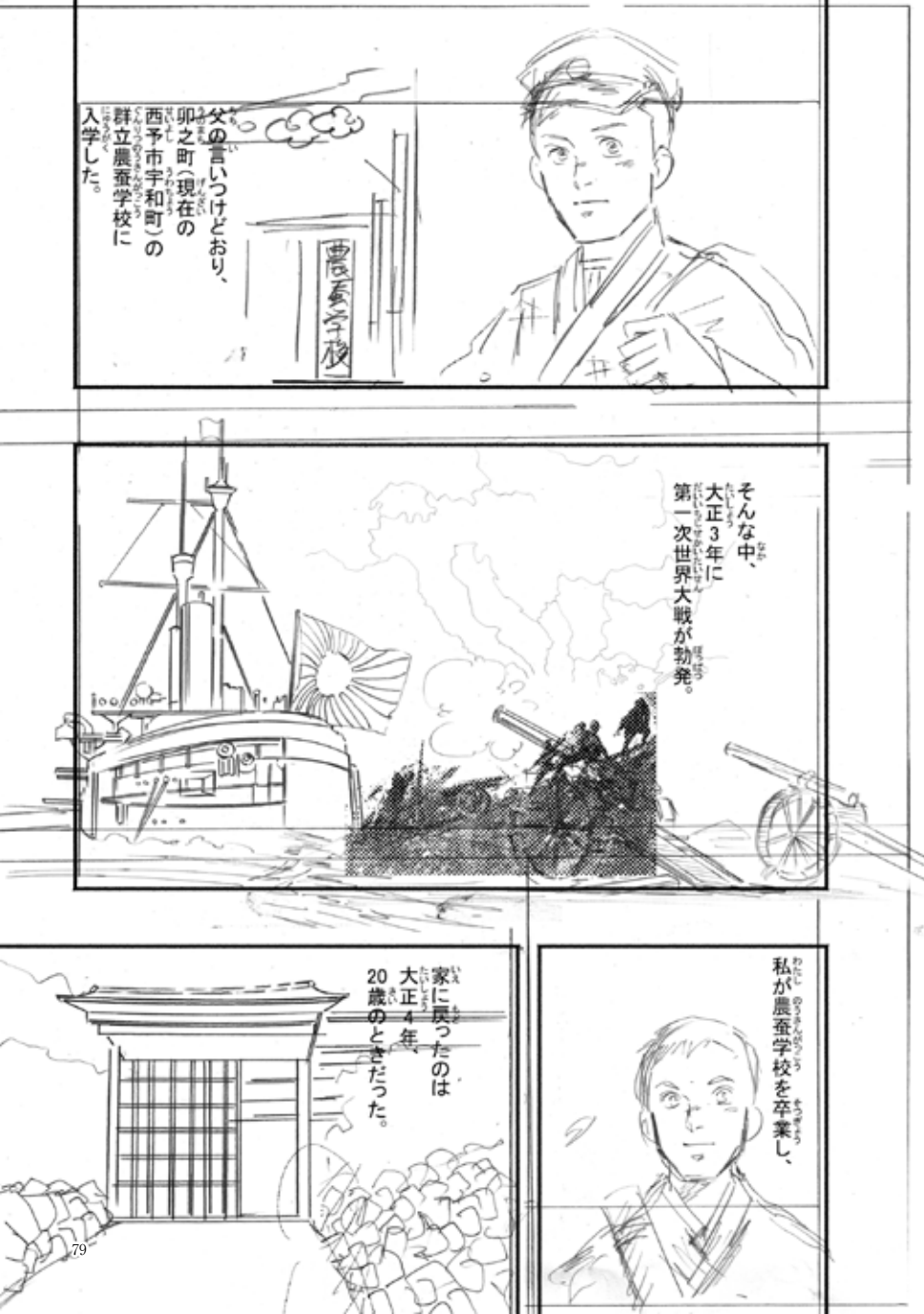
おまえは、地主として農業をやってきた井谷家の跡取りだ。

この先は卯之町の養蚕学校で農業を習ったのち家に戻りなさい

井谷の家を継ぐ者は、立派な資質を備えた者でなくてはならぬ。

たとえ長男に生まれたといっても価値のないものに家を継ぐ資格はない！

父の言葉は私にとっては意外であった。

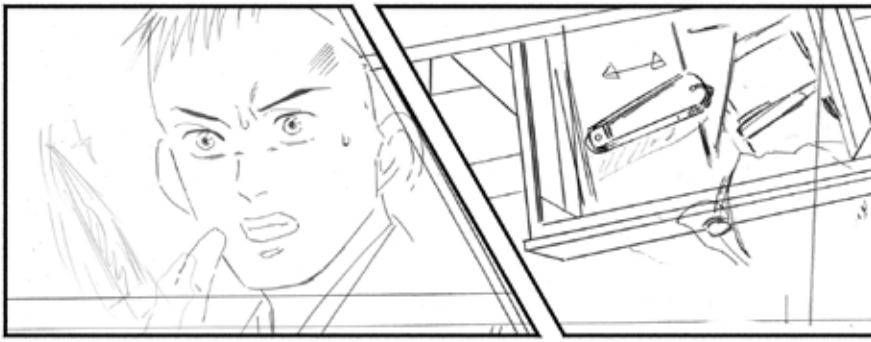

父の言いつけどおり、
卯之町（現在の
西予市宇和町）の
群立農蚕学校に
入学した。
農蚕学校
そんな中、
大正3年に
第一次世界大戦が勃発。
私が農蚕学校を卒業し、
家に戻ったのは
大正4年、
20歳のときだった。

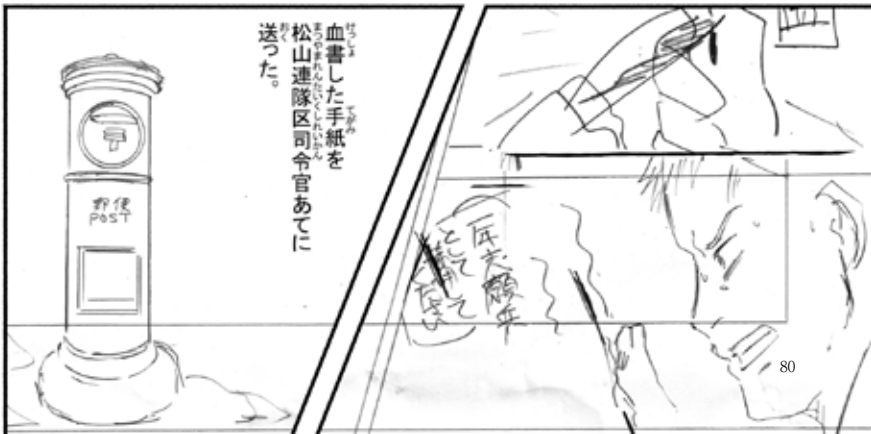
翌年、私は兵隊となるための身体検査を受けたが不合格となった。

体重が50kgに足りなかったからだ

不合格

俺だけ不合格とはしゃくだ！





血書した手紙を松山連隊区司令官あてに送った。

俺のことが記事になってる！
大正5年、私は松山第22連隊に一年志願兵として入営した。
これは愛国心でも、ましてや売名行為でもなかった。
新聞に記事が出るのと前後して連隊への入営が許可された。
友人2名は合格し、私だけ不合格で、悔しかったことがひとつ。

もうひとつは…
たとえ1年でもよいから父の側を離れたかった。
その後は
ここで1年間しごかれたのち
日吉村に戻った。

正、入るぞ！

一年間軍隊生活をして何が得られた？
体が元気になりました。

あの失望した顔！
ざまあみろだ。
やはり父との間には親子の愛情は無い。

父は私を心の底から憎んでいるんだ。
こっちだって良い息子になんかなってやるか！
ぐもんもん
あ、父上帰ってる…

父上が
お呼びですよ

命のへや

ふかん

えんがわ

正か。
そこに
座りなさい。

お前も22だ。
毎日
ブラブラして
いても
しょうがない。
北宇和郡役所の
土木課に入って、
測量や設計を
習得してこい。

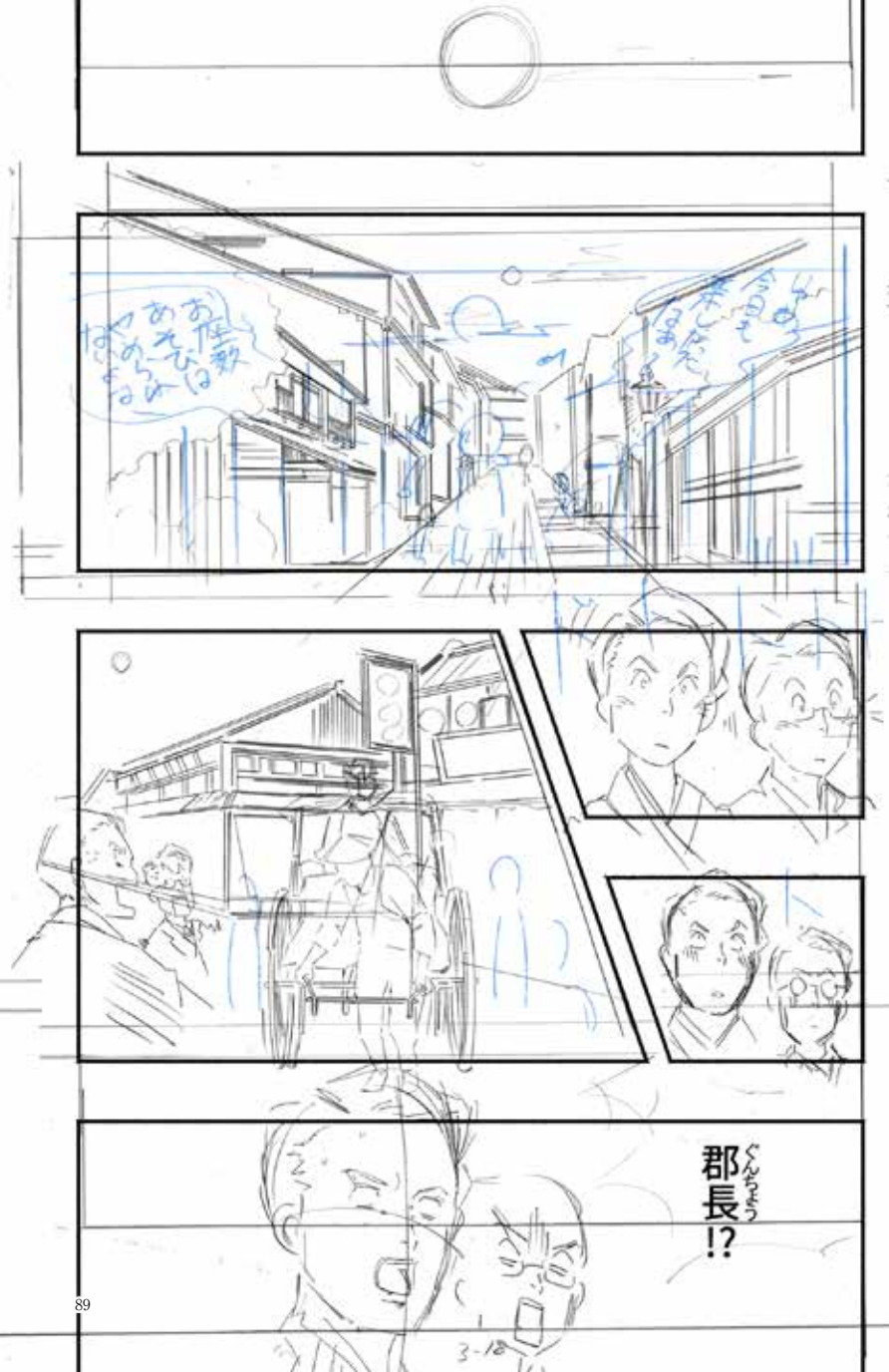
…はい。

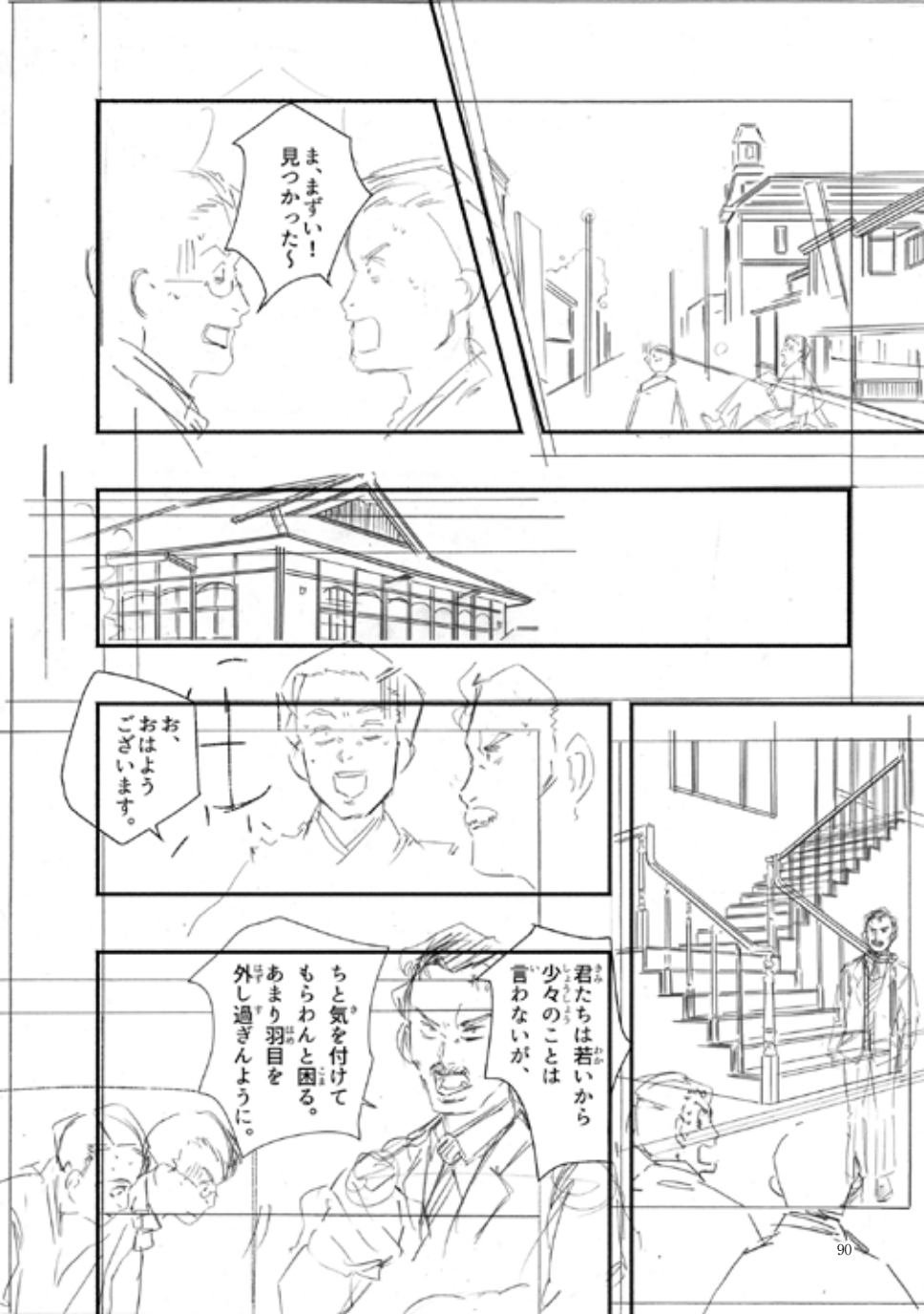
ハイハイ。
言われた通りに
すれば
いいんでしょ。

父の指図通り、私は日吉の家を出て、宇和島にある北宇和郡役所に勤めることになり、父の常宿である旅館へ下宿した。

今日は夕飯はいらないから。

事務所
大正7年、4月
おはよう
なんだ〜？
井谷君
顔が赤いぞ
今日は給料日だったからね
ああ、ああ
今日も帰りに行くかい？
家からも離れ、金を手に入れ、自由になったような気もした。
同僚女性
着物


郡長!?
3-18


ま、まずい！見つかった～
お、おはようございます。
君たちは若いから少々のことは言わないが、
ちと気を付けてもらわんと困る。あまり羽目を外し過ぎんように。

井谷君ちょっと…

郡長から言われたよ。

困るよ、そんな生活態度では。

だいたい君は仕事でもやる気がみられない…

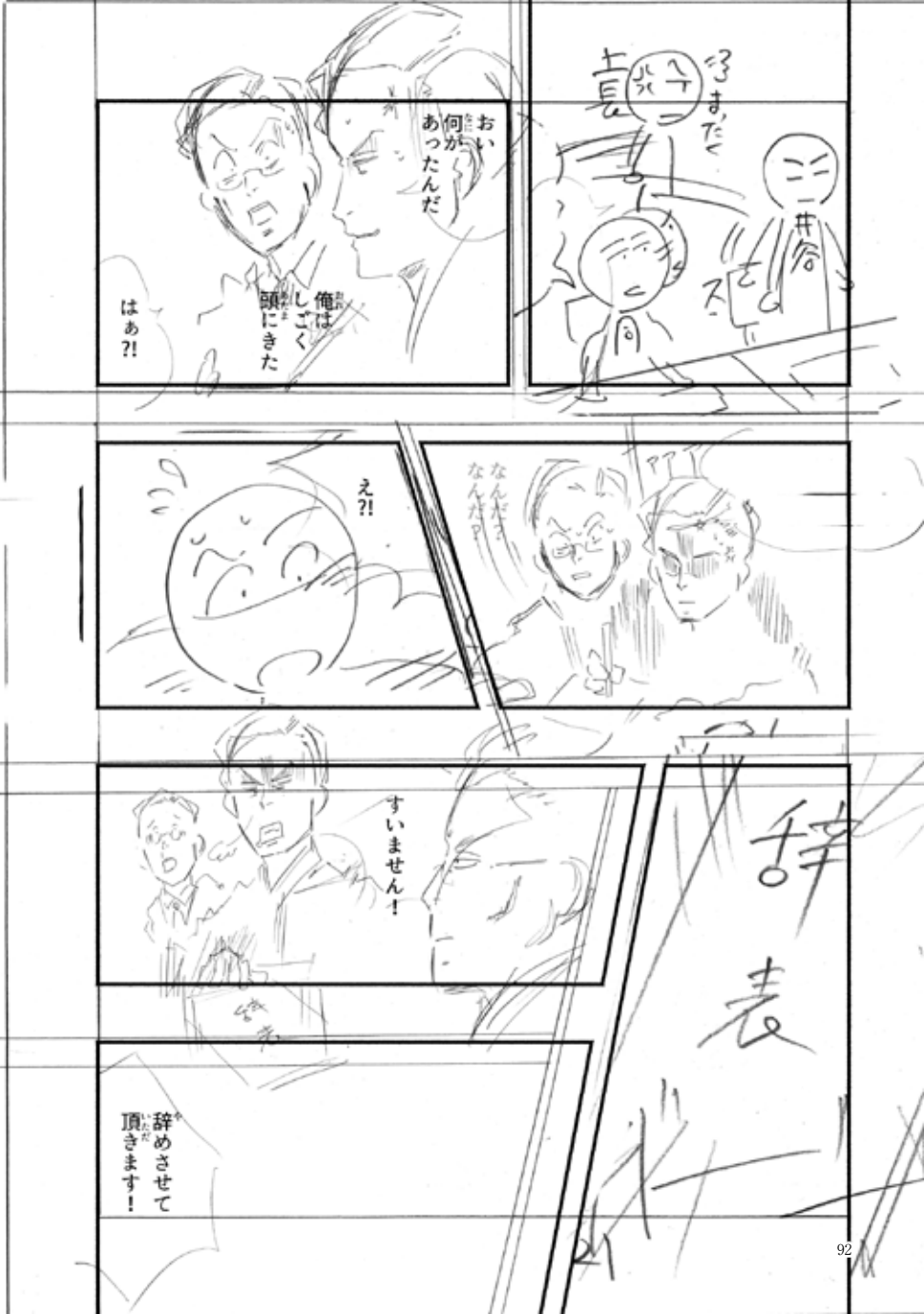
聞いたところ借金もあるらしいじゃないか。グチグチグチ…。

これまで父から口やかましく叱られてきたし、殴られたこともある。

しかし他人に叱責されたのはこれが初めてだった。

ネチネチ

…わかりました。


おい
何かあったんだ
俺はしごく頭にきた
はぁ?!
井谷
なんだ?
なんだ?
え?!
すいません!
辞表
辞めさせて頂きます!

まあ正吉、仕事はどうしたの？
辞めてきました
や、辞めてきた
郡長に話は聞いた。
お前は一体、何をしているっ！

情けない…。
これで借金を返してこい！
そして、もうこの家には
戻ってくるな！
勘当だ!!
父の指図に従いながら、自分の進路も見い出せない悶々とした日々。
そんな中、父への反発や生活の乱れから勘当の身となり、わたしは郷里を離れることになった。

父に渡された金で借金を返し、

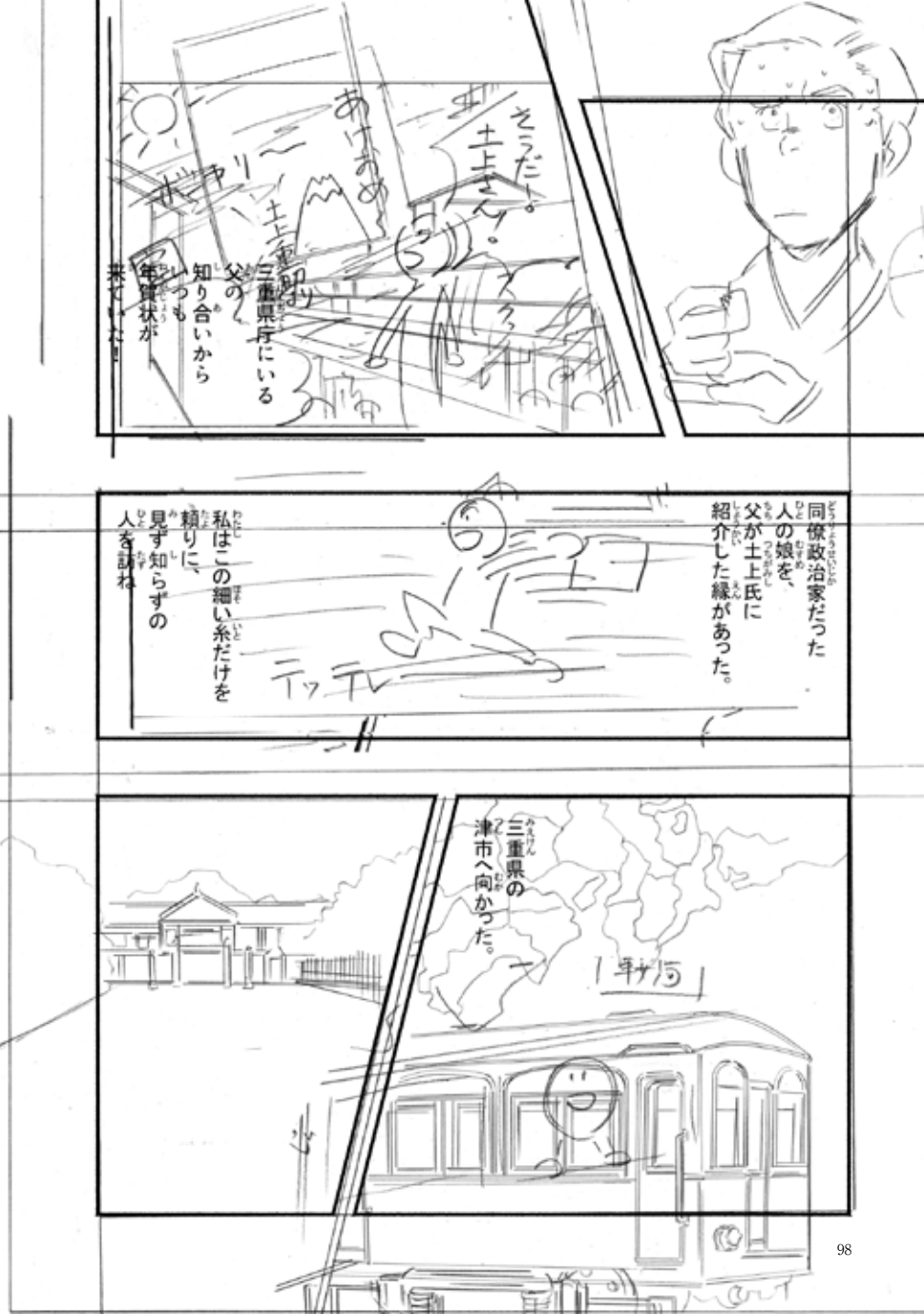
残ったわずかな金で、私は大阪行き・宇和島丸の三等室の切符を購入した。

海上約2日。八幡浜ー高浜ー今治ー高松ー神戸の各港を経由して、

宇和島丸は大阪に着いた。

大阪・道頓堀
大阪に着いたはいいが、行く宛はない。さて、どうしよう。
ガヤ
ガヤ
求人
求人

求人
俺にやれそうな仕事は、
なかなか無い…
どこに行こうか。
泊まる所もないし…
時
旅館で住み込みで働くとか？
そういえば!!
ポリ


そうだ！土上さん。
あけおめ
土上重知り
三重県庁にいる
父の
知り合いから
年賀状が
来ていた。
同僚政治家だった
人の娘を、
父が土上氏に
紹介した縁があった。
私はこの細い糸だけを
頼りに、
見ず知らずの
人を訪ね
三重県の
津市へ向かった。

愛媛の日吉から来た井谷と言います。
蚕糸課の土上さんはいらっしゃいますか。
井谷先生のところの坊ちゃんですか！よくいらっしゃった！
あと半時ほどで終わりますので…。
土上重助
あ、はじめまして井谷正吉です。
今日はどちらにお泊りですか？
まだ決まってなくて…。

ではぜひ家に。家内も喜びます。
それは助かります！
失礼します。
井谷先生には、本当によくしていただきました。
これ、粗茶ですが
あとこれ赤福…
とっても美味しいんですよ
ポイパク
はしたない

ところで、井谷さん
事情がおありなのでは…？
私は正直にこれまでのありのままを話した。
まあ、そんなことが。
さぞ大変だったでしょう。
ふむ…なるほど。話はわかりました。
家は狭いですが遠慮はいりません。当面の生活は心配しないでください。
ガッ
ありがとうございます
ただし井谷先生に手紙を出してご意向を伺ってみましょう。
どうか元気をお出しになって。
まずは食事にいたしましょう。

数日後、父からの返信があった。
正吉のような不心得者はどのような迷惑をお掛けするかわからぬゆえ、直ちに追放下されたく候。
ずいぶんお怒りだな…。
あなた、どうなさるの？
もはや家族みたいな君を追い出すなんてできない。
そうよ。
まずは職探しだ。
毎夜、我々は新聞広告の求人欄をみながら、勤め先を選考した。
新聞
求人広告
新聞

そんなある時…。

井谷君

七保村という村がある。木炭、養蚕を主とする山村だが、

ここの村長がなかなかの人物なのだ。

村に若い農業技術員が欲しいと言っている。

君は養蚕学校を出ているだろう？

はい。

村長は今夜津市に泊まっているんだ。その気があるならこれから会いに行かないか？

村長、連れてきました。
七保村村長の大瀬東作です。
おお、土上君か。入りたまえ。
農業技術員の件だな。そちらの彼か。

この人、只者ではない…。
よし、肚は決まったナイ。自分に何ができるかわからないが、しっかり
この人のもとで全力で働いてみよう！
私は農業技術員・農業補習学校教師として、村長である大瀬氏より20円も高い月給70円で採用された。
私が、平等で公正な社会を目指す思想運動である「社会主義」に興味を持つようになったのは、大瀬村長の向学心と、進化論の刺激からだった。
大瀬村長は熱心な科学研究者であり、ダーウィンの進化論を支持。また我が国を代表する生物学者・丘浅次郎博士に師事していた。
私は郷里にいた頃のやる気の無さがウソのように、一心に天文学や生物学、農村問題について学んだ。

また自らも音

丘博士からも
直接指導も受けた。

そのおかげで
私は独自に
生物学と社会科学を
結び付け、
社会現象を研究した。

井谷イズム
社会学
生物学

丘博士は
そんな私の
生物学的社会観を
「井谷イズム」と
命名してくださった。

さらに上京のたびに
社会主義運動を
行っている人たちとも接触。
堺利彦、山川均、安部磯雄、水野広徳と
いった人たちとの
交友を持った。
一方、七保村の学校での
生徒への講義は
生物学、進化論、
社会主義を
主体とした。
また有望な
青壮年たちによる
「土民協会」を組織して、
農村問題の研究を行った。
こうして農民と共に、
地域に根差して
生きることを
教えてくれたのは、
大瀬村長であった。
神戸・新川地区
この頃、
神戸の貧民街で
貧民救済活動を
していた、
キリスト教・
社会運動家の
賀川豊彦氏と
知り合った。

私もアメリカで生物学を学んだんですよ。

賀川豊彦

そうなんですか！ぜひ、お話を聞かせてください！

知識に飢えていた私は、月に何度となく七保村と神戸を往復した。

そこでは貧しい人のために無料の食事や寝る場所、医療を提供したり、

相互扶助、受け付けやりし献身的活動が行われていた。

植村龍世

ああ、井谷さんいらっしゃい。

先生は今、不在なんです。

どうぞお上がりになって。

ちょうどお昼の支度をしていたんです。

では、遠慮なく。失礼します！

植村さんは、どうして賀川さんの秘書に？

困っている人を助けたい。

その純粋な救済活動のお手伝いをしたくて。

ですが最近は、少し迷うこともあるんです…

きっとお疲れなんでしょう。ここの暑さは身にこたえる。
私のいる七保村は静かで、木立の日陰が気持ちいいんです。
どうぞいつでもいらして下さい。
真の社会運動について語り合いましょう。
はい
こうした社会主義思想に基づく私の活動を、大瀬村長は黙認してくれた。
そして村長が計画した全国町村長会の組織にも私を使ってくれた。
これはその後、大きな全国組織を作り上げるときの私の生きた経験となった。

仕事で上京した父・正命は
その帰途、突然七保村に現れた。

正吉の父でございます。村長には何とお礼を申し上げればよいか…。

いやいや、井谷君は良くやってくれています。こちらこそ、頭の下がる思いです。

失礼します。

…父上！

元気そうだな。少しやせたか？

積もる話もあるだろう。

今日は帰って親孝行しなさい。

はい。ありがとうございます。

その晩父は私の部屋に泊まった。

正よ。勘当を許すから、なるべく早く帰ってくれ。

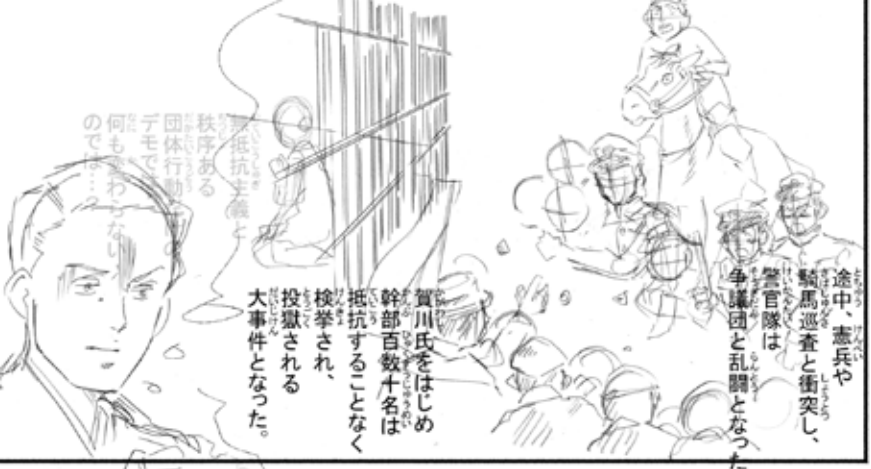
しかし、飛ぶ鳥は後を濁さず。辞める時が大事だぞ。

一方この頃、賀川氏は初期の貧民救済活動から労働者のための運動の指導者となっていた。

大正10年7月、神戸川崎造船所・三菱造船所の労働争議が悪化した神戸に私は駆け付けた。賀川氏がこの労働争議の中心人物であったからである。

争議団は労働歌を歌いながら賀川氏を先頭に行進した。

参加者は約1万人という大規模であった。


途中、憲兵や騎馬巡査と衝突し、警官隊は争議団と乱闘となった。
賀川氏をはじめ幹部百数十名は抵抗することなく検挙され、投獄される大事件となった。
抵抗主義と秩序ある団体行動デモでは何も変わらないのでは…

私は賀川さんを尊敬している。それは、社会運動の実践者であると思ったからだ。

しかし献身的な救貧運動にも限界がある。社会そのものの改革をせずに、問題の解決はない。
賀川さんと私の考えは、根本的に違うようだ。

私も同感です。ここだけでの救済活動では、限定的でしかない。
何者にも束縛や干渉をされない皆が平等の社会を実現したい。

君と以前話した、自由人による自由組織。皆で考え、皆が仕事を持ち、皆で村の暮らしを作っていく。私は故郷に帰って、そんな奇想天外な村づくりを実行しようと思う。君はどうする？

ぜひとも井谷さんのお手伝いがしたい。共にやりましょう！

このときの計画が「明星ヶ丘我らの村」計画である。

植村は賀川夫妻にこのことを話して快諾を得て、新川をあとにした。

私は大瀬村長に計画の内容を伝え、七保村を辞し、故郷日吉村へと帰ることとなった。

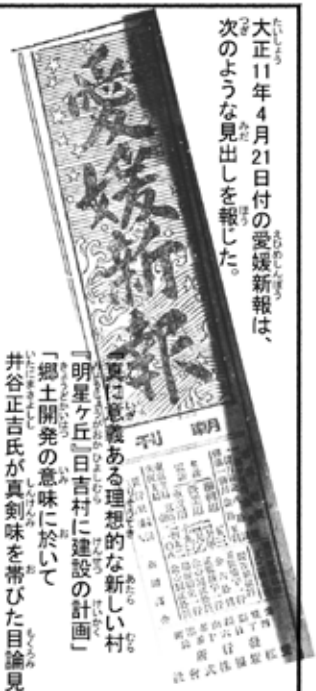
大正11年4月のことだった。

地主から土地を借り、
小作料を払って
その土地を耕作する
小作農民の生活は、
貧困そのものだった。

南予地方の
農山村では
一粒の米も
食べられないほど
生活が苦しい
人々が多かった。

彼らの主食は
麦、さつま芋、
大根葉などだった。

大正11年4月21日付の愛媛新報は、
次のような見出しを報じた。



この
「明星ケ丘
我らの村」計画と
共に
社会主義者である
私の帰郷が
報道され
警察は警戒を
強めた。

そして運動を
始めると、
私には常に
尾行が
つけられていた。

この頃、父・正命は郵便局長もやっていたが、
社会主義者が身内にいては困るというので、局長を辞めさせられた。
くびっ
井谷さん、坊ちゃんが新聞にのっちょったが…大丈夫なんか？
警察に捕まりでもしたら…。親への反抗が過ぎるな
いやぁ、困ったもんで…
父は政治家仲間や知人から色々と言われたらしい。

※日吉村に帰った後の、2人

ここはあまり宗教色を出さず
開襟シャツにスラックス程度の
簡素な服装でお願いします

軍国思想が高まる中、

村役場吏員、小学校教員、警察官、
消防組幹部までもが
参加するメーデーは、
全国でも明星ケ丘だけだった。

参加した労働者たちの
体験談や
意見の発表に、
一同、熱心に耳を傾けた。

みな
新しい考え方に共鳴し、
焚火を囲んで
夜遅くまで語り合った。

私たちは
下鍵山の高台一帯を
「明星ケ丘」と命名し、
農民がみずからの
経済的、社会的
地位改善をめざして行う
「農民運動」の拠点とした。

父にとっては、驚きの連続であったと思う。

父上、こちらは賀川豊彦さんの秘書をされていた植村さん、

こちらは三重で牧師をされていた宇都宮さん。あちらは…

家の周辺を「明星ケ丘」「移らの村」などと勝手に名付け、

素性もわからない痩せ浪人のような者を次々と呼び寄せ、

畑仕事や木こりなどの仕事を割り振り、勝手なことをするのだから、父が呆気にとられたのも無理はない。

さらに松山出身の水野広徳、社会運動家の安部磯雄、賀川豊彦などという、全国的にも著名な面々が伊予の山村を訪れるものだから、

明星ケ丘の存在は世間からも注目されるようになった。

そして私たちは、我らの村での指針をまとめた「明星ヶ丘綱領」をつくり、声明書を公表した。

【明星ヶ丘綱領】

1、明星ヶ丘は我らの村という言葉を用いる。各人の住む村と国とは我らのものであるという意味である

2、明星ヶ丘は宇宙同胞の精神に立脚する。ゆえに世界主義である。世界人類は全一であるというところから出発する。

3、明星ヶ丘は愛と平和における全人類の結合である。

4、明星ヶ丘はこの思想に到達すべきために弱き者、虐げられつつある者のために同人の力を傾注する。

5、明星ヶ丘は善きことを豊富に基礎とすることに努力する。

6、明星ヶ丘は規約を設けない。束縛と圧迫をどこまでも排斥する。

7、明星ヶ丘は同人になってくださるものと同人にならなくとも応分の助力を惜しまない人を心から歓迎する。

さらに私たちは、昼は労働、夜は南予の各村々をめぐって、学習会・講演会を開き、新しい考え方を説いてまわった。

我々はなぜ貧乏なのか！どうしたら貧乏をなくすることができるのか！

参加した人々は、農山村の現実を変えていく担い手としてその考えを吸収していった。

明星ケ丘の新しい村の建設を聞きつけ、移住してくる人、応援してくれる人も、県内外から集まった。

こうして下健山幸田町は商店が立ち並び、人通りの多い活気ある町が作られていった。

こうしたなか、一つの事業が立ち上がった。

義農武左衛門記念碑の運搬事業である。

自ら資金を投じ、郷土の義民の勇気ある行動を称えるために

石碑を山口県から取り寄せていた。

しかし運搬建立する費用が用意できず、石碑は10年以上宇和島の港に放置されていた。

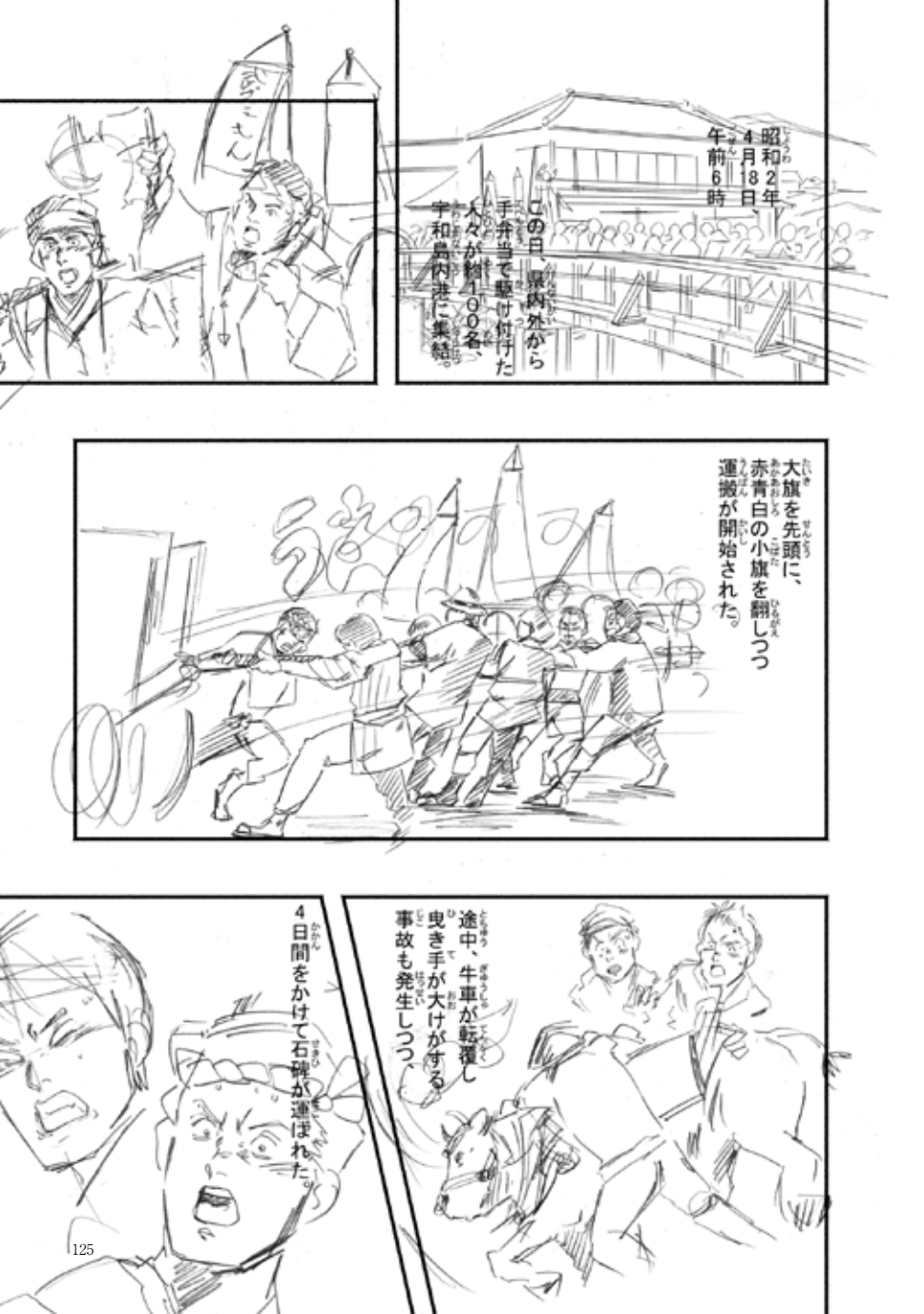
義農武左衛門とは日吉村上大野の農民で、江戸時代に起きた「農民一揆の代表者であった人物である。

この農民救済の偉業をなした武左衛門の碑の建設を父・正命が計画。

武左衛門さんの石碑を、南予農民の団結のシンボルにしようじゃないか！

みんなで明星ヶ丘まで運搬し、碑を建てよう！

全日本農民組合の農民など4500名を超える人々が参加し、南予空前の壮大な事業となった。


昭和2年
4月18日
午前6時
この日、県内外から
手弁当で駆け付けた
人々が約100名、
宇和島内港に集結。
大旗を先頭に、
赤青白の小旗を翻しつつ
運搬が開始された。
途中、牛車が転覆し
曳き手が大けがする
事故も発生しつつ、
4日間をかけて石碑が運ばれた。

午後5時にようやく明星ケ丘の武左衛門広場まで引き上げた。
この記念碑建立に参加した幾千の人々は、武左衛門と共に行動した農民たちの末裔なのだ。
石碑
かつて武左衛門らが決起して下った街道の逆コースをとり、記念碑と鎮魂のための堂を建立したのであった。

←頭がたち落としで切れます

私はその後も、南予各地の村々をくまなく訪ね、貧しさに困る人々のための活動を行った。

地主も小作人も、まじめにこの問題を解決せねばならぬ時が来たのです！

1ケ月のうち25日間は数名の青年と共に村々をまわり、農家や漁師の家に泊めてもらいながら、演説をして歩く。

行く先々で、近在の農漁民が集まる。宿では安酒を酌み交わして話し込む。

いやあ、あんたの話は分かりやすい！まあ呑んでください。

いただきます！

わしの知り合いの村でも講演して貰えんですか？

もちろんですよ！

正吉さんは実によく道を知っとった。

着物に草履で、はるばる山路を越えて来てなあ。

小作争議の応援で急いどる時は自転車で走って来よらい。

南予の村で、正吉さんが行ってない村は無いじゃろう。
山でも谷でも浜辺でも、あの人の歩かんかった道はないわい。
まさに、わしらの「先達」であったんよ。
昭和5年、私は全国大衆党愛媛県連合会会長を辞任。昭和6年の満州事変以降、軍国主義・ファシズムの風潮が強まる中で、わたしたちの運動は抑圧された。
私たちが目指した「新しい村」・平民の世の中を実現する運動の進展は、以後15年続いた戦争が終結するまで待たねばならなかった。

第4章　現代(げんだい)に受(う)け継(つ)がれる井谷(いたに)イズム

昭和9年
10月25日
宇和島・正吉宅
正吉さん、ちょっと…。
午後までもつかどうか…。
そうですか…

危篤の病人が起こしてほしいと訴えたら、それはもう最後の時だ。
そうしてあげなさい。
父・正命
享年69歳
お父さま!

スッ…
父をよく看てくれて、助かったよ。
母さんも、親戚たちも、
お前に感謝している。
そんな。できることをしただけです。
あなたが留守で不安な時、支えてくださったのはお義父様でしたから…。
…そうか。

お義父様、いつもあなたの事を、こうおっしゃっていました。

正はお前の知っている通りの性格だから、一生貧乏するだろう。

お前には苦労を掛けると思うと気の毒だが、これも縁だ。

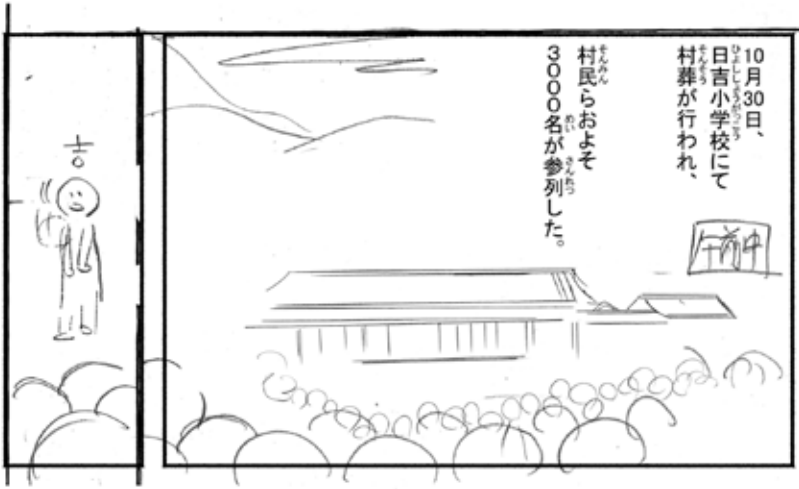
どうか正を頼むよ。あれは牢屋に入ることもあるかもしれんが、人を騙したり盗みなどは決してしない。

これは不名誉なことではない。

「捕まるとしたら国事犯というやつで、心配はいらんよ。」

「これからは、きっとあいつの思うような世の中になるだろう。」って――――！

そんなことを言っていたのか。


10月30日、
日吉小学校にて
村葬が行われ、
村民らおよそ
3000名が参列した。

父は
日吉村の
発展のために、
ほとんど家庭を
顧みる
余裕を持たず、
東奔西走する
生涯でした。
私はそんな
井谷家の長男として
父の厳しさを
疎ましく
思ったことや
ときに憎んだことも
ありました。

父は、書を良くし、
詩吟、唄や踊りも好きで、
和歌もたしなみました。

『吾こそは
貧しくなるも
吾郷の
栄ゆくこそ　楽しかりける』
（たとえ私は貧しくなっても、
この日吉村が栄えて
豊かになっていくことが、
私には本当に嬉しいことだ）

このような歌を残すほど、
地域の発展を願い、
尽くしてきた父でした。

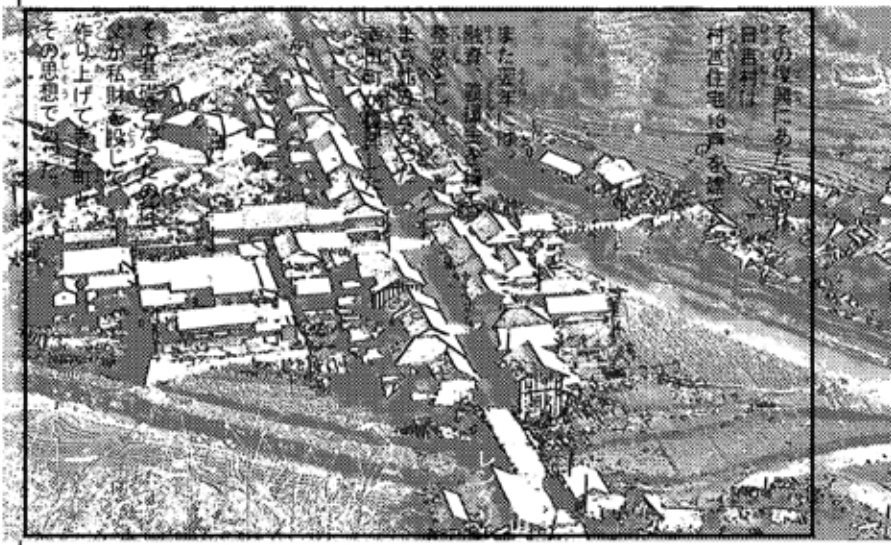
日吉を通る国鉄は
実現しなかったが、
政府はその代替として
日吉にも通る
省営バスの2の国鉄バスの
運行を求めた。
『一筋に
尽くすまごころ
つらぬきて
開かれにけり 二筋の道』
吉良義高氏が詠んだ
この歌は、
父の生涯を良く表している。

下鍵山幸田町は
南予奥地交通の要衝地として
整備が進み、
大正3年には93戸514人が
居住する町へと発展した。

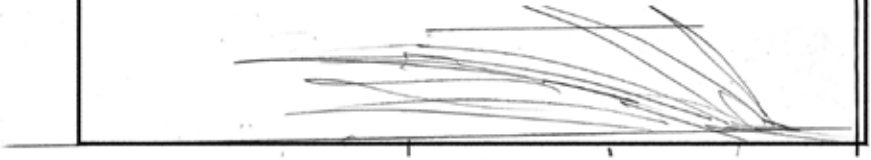
その後父・正命が
この世を去った
翌年の昭和10年、
幸田町の四ツ辻付近から
出火した火事が発生

日吉村のみならず
近隣の消防団員750人が
懸命な消火活動を行った。

しかし強風と給水不足により
3時間で67戸が焼失し、
住民176人が罹災した。


その後、
日吉村は
村営住宅10戸を建て
また翌年には
戦後、農地改革を
整備し
生き残った
吉田町の
その基礎
が私財を投じ
作り上げて
その思想で

農民は農民の代表を出そう
正吉
#石
戦後、
私は日本社会党の結党に参加し、
国政へと参画。
衆議院議員4回当選を果たし、
昭和42年に引退。
その後下鍵山に戻った。



井谷正吉は、政界引退後の昭和48年の秋ごろから体調を崩し、

昭和51年2月10日、永眠した。

同年2月16日、父・正命と同じく村葬が行われ、

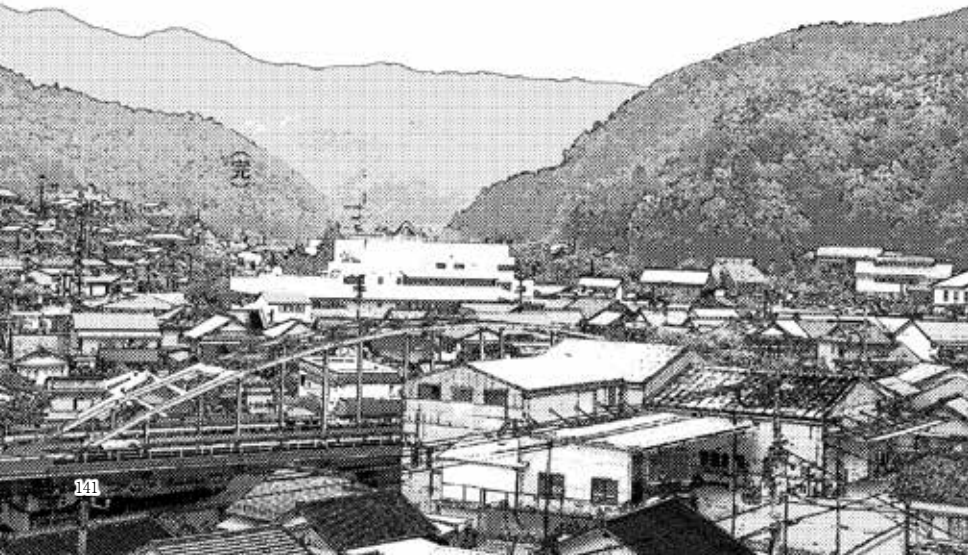
村民はじめ関係者多数は心からの哀悼の意を捧げ、別れを惜しんだ。

明治から大正にかけて、
南予交通網の整備と
日吉村の発展に
私財を投じて貢献した、
父・正命。

大正、昭和時代に、
農民や労働者などに
抑圧されていた人々の
解放運動や、
明星ヶ丘我らの村運動に
尽力した、
息子・正吉。

武左衛門の伝統が
生き続けるように、
井谷父子の遺した足跡は、
南予の民衆、
愛媛の民衆、
日本の民衆の
歴史のなかに
深く刻み込まれている。

激動の時代にあって、
井谷父子が伝えた
「井谷イズム」は、
地域発展の歴史として、
これからも
受け継がれていくことだろう。



道づくり・人づくりに力を注いだ父・井谷正命

井谷正命は慶應（けいおう）4年（1869）、井谷為祥（ためひろ）の三男に生まれ、幼名を辰三郎（ときさぶろう）といいました。15歳、吉田中学校在学中に旧藩士今城家の養子となりましたが、兄が死去したため辰三郎が家督を継ぎ、正命と改名しました。

明治23年（1890）、日吉村の発足に伴い、正命は関西法律学校（のちの関西大学）に学び、学問・見識を身に付けた人物ということが村民に評価され、日吉村の初代村長に就任します。正命は道づくり・町づくり・人づくりを重点施策とし、村長職を明治27年（1894）まで務めました。その後、東宇和郡魚成村村長、愛媛県会議員、北宇和郡会議長、県農会副会長、郡農会長、地方森林会議員等を務めた後、昭和9年その生涯を閉じました。

正命の生涯は交通路開発に捧げられ、宇和島・須崎線、長浜・日吉線の道路整備を進めました。また、鉄道誘致の運動を展開しましたが、政変のために実現できず、国鉄バスの代行となりました。

正命の想い描いた地域発展の基礎は、山間の村にあっては、経済・産業・文化の発展にも道路・鉄道などの交通が欠かせないということでした。

道路整備と共に描いたのが日吉町の建設でした。その中心街とするために下鍵山幸田町づくりを推し進めました。

東西に日吉線（宇和島・須崎線）、南北に野村線（長浜・日吉線）を配して十字路とし、18尺から24尺幅の道路を建設しました。これは現在の2車線道路の幅と同等の幅員で、当時愛媛県下ではもっとも

広い道路でした。

正命は、先祖伝来の所有田地を無償で開放し、また、家屋を新築して移住者に与えるなど、私財を投じて地域の発展のために尽くしました。

正命が道路建設と町づくりに合わせて力を注いだのが人づくり、すなわち教育でした。それは、村の発展のためには産業の発展が必要であり、そのため人材の育成が必要との考えがありました。明治23年（1890）に農林業を学ぶ実業学校の設立を立案。その後、郡会議員であった正命は実業学家の自宅を学校として開放し、正命自らまた妻の和香栄も教師を務めました。開設から大正4年（1915）の閉校に至るまで、村内80名、村外11名が学び、その後の村の教育に大きな影響を残しました。

左:正命、右:妻・和香栄

井谷正命　略年譜

慶應4年　庄屋・井谷家の三男に生まれる。幼名・辰三郎。

明治14年　吉田中学校在学中、三間村の旧藩士・今城家の養子となる。

明治18年　兄が死去したため井谷家に戻り、家督を継ぐ。

明治23年　日吉村の初代村長となる。

明治25年　和香栄と結婚。

明治26年　宇和島須崎線道路改修運動を始め、陳情書を県に提出する。

明治29年　日吉村会議員となる。

明治32年　北宇和郡会議員となる。

明治35年　道路整備に伴う政治的な争いのため、郡会議員を辞職。同年、郡役所吏員となる。所有地を無償提供し、道路建設を推進。この頃下鍵山集落の街並み造成。

明治39年　私立日吉実業学校設立。愛媛県会議員となる。鉄道誘致運動を始める。

明治44年　日吉村会議員、および日吉郵便局長となる。

大正2年　宇和島・日吉道路開通。

大正4年　私立日吉実業学校廃校。

大正8年　武左衛門の顕彰碑をつくるが、資金不足で日吉村まで運べず宇和島港に放置する。

昭和9年　死去。67歳。村葬に二千人余りが参列する。

明星ヶ丘を拠点として小作人や労働者のために闘った
息子・井谷正吉

井谷正吉は、明治29年（1869）、井谷家の長男として誕生しました。父・正命の公共投資で家財の多くが失われ、幼少の頃から実に質素な環境で育ちました。日吉村尋常小学校、私立日吉実業学校、東宇和郡農蚕学校に学んだのち、大正3年（1914）に第一次世界大戦が勃発、正吉も松山第二二聯隊（れんたい）に一年志願兵として服役します。その後、父・正命の指図により北宇和郡役所土木課に勤務します。

後列左：妹・清子、右：姉・登喜子
前列左：正吉、右：弟・正巳

正吉の転機となったのは、三重県七保（ななほ）村の村長大瀬東作（おおせとうさく）との出会いでした。大瀬村長は、知人の紹介でやってきた正吉を、村長職よりも20円高い月給70円で農業技術員・農業補習学校教師として採用しました。

ここで正吉は政治運動や青年教育を行い、男女平等の「七保村青年団」の結成や、農村問題を研究する「土民協会」を組織します。大瀬村長は三重県町村長会を初めて作り、続いて全国町村会を組織して義務教育費の全額国庫負担運動を起こしました。正吉は大瀬に学び、時には助け、3年間を三重で過ごしました。

この頃、正吉は、丘浅次郎博士にも師事して進化論を研究、生物学を社会科学に結び付けて社会改造論に発展させるという「井谷イズム」を生みます。また、賀川豊彦、堺利彦、山川均、阿部磯雄たちとも交わり、社会運動活動に専念していきます。

大正11年（1922）5月1日、正吉は日吉村の明星ヶ丘で四国最初のメーデーを行いました。このとき、労働者や農民ら34名が集まりました。

正吉は、「明星ヶ丘我等の村」をつくり、農民・労働者運動、部落解放運動、地方自治運動を行い、各地で

講演会を催すなどの活動を展開しました。

また義農武左衛門及び同志者碑（鬼北町指定文化財）は、正吉が中心となって南予の農民・労働者が団結し、明星ヶ丘へと運搬したものです。この碑の建立は、父・正命が発起し、山口県から石材を取り寄せましたが、資金不足で宇和島港に放置されたままでした。正吉はこの碑を建立することで「民衆の村」の象徴としました。

第二次世界大戦が終わると、正吉は日本社会党の結党に参加。昭和42年（1927）までに4回当選し、国政に参与しました。政界を引退後、勲三等旭日中綬章、愛媛県功労賞、日吉村名誉村民、日本農民運動に貢献したことを表彰されました。昭和51年（1976）2月10日に永眠、村葬が行われました。

井谷正吉　略年譜

明治29年　父・正命、母・和香栄のもと、長男として誕生。
明治41年　日吉実業学校入学。
明治44年　東宇和郡立農蚕学校に入学。
大正5年　松山第二十二聯隊に一念志願兵として入隊。
大正7年　北宇和郡役所土木課に勤務。
大正8年　三重県度会郡七保村の村長・大瀬東作と出会う。同村の農事技術員として勤務。
大正9年　七保村農業補習学校の教師を兼ね、青年団を結成し、土民協会を組織。新聞「森のささやき」を自費刊行する。
大正11年　日吉村で「明星ヶ丘我等の村」をつくり、四国初のメーデーを挙行する。
大正12年　明星ヶ丘で連続講座を開催。日吉村職工組合をつくり、小作争議を指導。
昭和2年　武左衛門碑を日吉村に建立。
昭和20年　日本社会党の結党に参加し、中央委員、県連顧問となる。
昭和22年　衆議院議員となる。以降3回、衆議院議員に当選。
昭和42年　政界第一線を引退。
昭和44年　勲三等旭日中綬章を授与される。
昭和46年　愛媛県功労賞、日吉村名誉村民。
昭和51年　死去。79歳。村葬が執り行われる。

【参考文献】

井谷正吉顕彰事業推進委員会（1980）『風雪の碑　明星ヶ丘　―井谷正吉伝―』井谷正吉生涯記編集委員会

井谷正吉（2003）『ちんがらまんがら』文藝書房

日吉村誌編集委員会（1993）『日吉村誌』日吉村教育委員会内 日吉村誌編集委員会

日吉村役場（2004）『日吉村ふるさと写真集』愛媛県日吉村／株式会社ぎょうせい

鬼北町教育委員会（2012）『井谷家二代記～地域の発展に懸けた父子の軌跡～』鬼北町教育委員会

鬼北町教育委員会（2012）『明星ヶ丘・井谷家にみる日吉の文化』鬼北町教育委員会

鬼北町教育委員会（20●●）『日吉　井谷家住宅』鬼北町教育委員会

宮本春樹、大森時政（2023）『庫外禁止録（井谷本）現代語訳版』鬼北町教育委員会

鬼北町（2012）『広報きほく：２０１２年10月号』鬼北町教育委員会

愛媛県教育委員会（2017）『ふるさとのくらしと産業11　―鬼北町―』愛媛県教育委員会

川道哲三（2011）『堺利彦と明星ヶ丘』※愛媛県立図書館所蔵

佐々木仁三郎（1971）『大瀬東作伝』三重県町村会

矢野和泉 監修（2003）『目で見る　宇和島・北宇和・南宇和の１００年』株式会社郷土出版社

近代史文庫 編（1983）『郷土に生きた人々　―愛媛県―』株式会社静山社

島津豊幸（1988）『愛媛県の百年　県民百年史』株式会社山川出版社

客野澄博（1967）『明治百年歴史の証言台』愛媛新聞社

牧野隆史（2002）『発掘えひめ人　近代を拓いた１０１人』愛媛新聞社

愛媛県議会史編纂委員会（1977）『愛媛県議会史　第二巻』愛媛県議会

愛媛県商工労働部労政課（1960）『愛媛労働運動史：資料 第３巻』愛媛県商工労働部労政課

松本八十馬（1922）『宇喜五郡共進会附文化展覧会記念写真帖』※愛媛県立図書館所蔵

【出典情報】

01郵政博物館（2013）『郵便貯金証書の移り変わり』https://www.postalmuseum.jp/column/transition/certificate.html

※以下、国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/ja/）より

02田能村梅士（1901）『明治法律学校二十年史』明治法律学校出版部講法会（https://dl.ndl.go.jp/pid/813378）を加工して作成

03赤松三代吉（1894）『愛媛県史談』大和屋教育書房（https://dl.ndl.go.jp/pid/766439）を加工して作成

04『大東亜写真年報 2602 年版』（1942）同盟通信社（https://dl.ndl.go.jp/pid/1123693）を加工して作成

05『浪花名勝』（1910）光村出版部（https://dl.ndl.go.jp/pid/765844）を加工して作成

06大阪府 編（1914）『大阪府写真帖』大阪府（https://dl.ndl.go.jp/pid/966056）を加工して作成

07賀川豊彦（1915）『貧民心理の研究』警醒社書店（https://dl.ndl.go.jp/pid/953915）を加工して作成

08田山宗尭（1912）『日本写真帖』ともゑ商会（https://dl.ndl.go.jp/pid/762376）を加工して作成

マンガふるさとの偉人

井谷家二代記

―地域の発展につくした父子の軌跡―

発行日	2024 年 00 月 00 日 初版第 1 刷発行
作画	南野しま
原作・企画・発行・著作権	鬼北町教育委員会
	〒 798-1395　愛媛県北宇和郡鬼北町大字近永 800 番地 1
	Tel：0895-45-1111（代表）
制作	有限会社クリエイティブ・ユニット
	〒 791-2112 愛媛県松山市北梅本町 2766-3
	Tel：089-990-8100
印刷所	●●●●